

深思
北京



東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP)

2019年度北京社会文化研修報告集

深思北京

2019 年度北京社会文化研修——深思北京

北京は何と言っても中国の首都であり、政治の中心です。そして、京劇に代表される伝統文化の中心でありながら、現代アートに代表される新しい文化を発信する重要な場所でもあります。「老北京」と呼ばれる独特の文化が今も残っており、北京はじつにさまざまな顔を持つ重層的な場所です。この研修を「深思北京」と名づけたのは、参加する皆さんに、北京がもつ重層的な姿を体得し、考えてほしいと願うからです。

この研修は、教養教育高度化機構国際連携部門のリベラルアーツ・プログラム（LAP）が、中国人民大学文学院と北京戯曲評論学会のご協力をいただきながら運営しました。

北京では、中国に関する講義や学生交流、中国企業や文化施設の見学や関係者との懇談が行われ、「北京」を体験し、中国語の応用力を磨くとともに、中国を重層的に考察する充実した一週間となりました。使用言語は中国語のみとし、日本語は原則禁止にしました。

今年度のプログラムには学部二年 4 名、四年 4 名の学生が参加しました。

本冊子は、2019 年 9 月 8 日から 15 日の一週間における、東大生の北京見聞録であり、北京という新しき古都に対する思考集でもあります。

2020 年 3 月

目次

スケジュール

活動報告

【北京を見つめる】

時間と北京

*参加「深思北京」の意義在哪里

三浦駿人 7

【中国を見つめる】

「支教」から見る中国と日本の教育格差

*「中国」そのものを学ぶ

田尻夏希 37

中華文化と日本文化の共通基盤

— 中国人が守り抜いているものと日本人が大切にしているもの —

*北京研修が変えた北京のイメージ

永安郁弥 42

古都か？新都か？

*「深思北京」Ⅱ「深思人生」？

増田夏子 14

「イメージ」と「実像」の狭間で揺れ動く日中

— 北京社会文化研修「深思北京」を通して —

*北京社会文化研修「深思北京」で出会った人々の魅力

布施晴香 48

北京の伝統文化「戏剧」

— 俳優と演奏員・観客・研究者 —

*お茶屋のおばさん

頃安美咲 19

あとがき

伊藤徳也 55

北京における貧富の差

*中国における承継と発展

温可迪 28

編輯後記

写真集

執筆者一覧

スケジュール

	午前	午後
9月8日(日)	東京出発	北京到着 北京戯曲評論学会による歓迎会
9月9日(月)	松下記念館	北京大学芸術学院 座談会 講義①昆曲入門と実演
9月10日(火)	人民中国雑誌社 見学・座談会	中華文化学院 講義②中華文化の人文精神 国能中電 座談会
9月11日(水)	中国人民大学文学部 歓迎式	講義③映画論入門 故宮博物院 見学
9月12日(木)	中国人民大学文学部 講義④中国古代作家研究	講義⑤西洋古典文芸理論 日中学生交流
9月13日(金)	法海寺、承恩寺 見学 講座⑥北京の歴史と民俗	京西五里坨民俗陳列館 見学 講座⑦中国書道入門
9月14日(土)	全民暢読書店 見学 講義⑦『紅樓夢』を読む	中国世界平和基金会 見学 講義⑧華道体験 中秋雅集
9月15日(日)	自由活動	北京出発 日本帰国

活動報告

【北京を見つめる】



午門から望む天安門と人民大会堂

三浦 駿人

北京の都市空間と政治的象徴性

北京内城の正門であった正陽門（現正門）の東側の、かつての北京正陽門東駅の建物を利用した鉄道博物館の隣に、ひっそりと北京市規画展覧館が建っている。北側を山に囲まれた北京の地理的特徴の解説に始まり、伝統建築の展示などを経た3階には、北京中心部の巨大模型が展示され、市中心部の様子を立体的に鳥瞰することが出来る。そこでまず目に入るのは、中心にある巨大な紫禁城であるが、すぐに南北、東西に走る軸に気が付く。南北には、南から永定門、正陽門、天安門、外朝三殿、内廷三殿、景山公園、鐘樓・鼓樓、そしてやや北へ行ってオリンピック公園が連なる。東西には天安門と天安門広場を隔てる、新中国成立後に整備された長安街が貫き、天安門から見て西側には金融街、東側には王府井に国貿と、北京の経済発展の象徴といえる地域が存在する。

このいわば南北の歴史的な軸と東西の現代的な軸の交わる点に位置し、毛沢東の肖像画が掲げられた天安門の反対側にあるのが、厳重に警備された広大な天安門広場である。広場の東側には、中国の歴史的文物を清までの古代史と五・四運動以降の革命史の大きく二つに分けて展示する中国国家博物館が、西側には、民主集中制と称される現代中国政治制度の核心たる人民大会堂が存在する。人民大会堂及び周囲の政府関連施設がある場所は、かつて六部が置かれていた場所であり、その意味で空間の歴史の意味を引き継いでいるが、一方で皇帝権力の象徴である紫禁城は現在故宫博物院として、政治的世界から完全に切り離されている。

そして新中国により意義付けられ再編された歴史と現代中国の権力の象徴が向かい合う、その中間にある広場は、一九五〇年代に現在の形が作られた、「新しい」政治空間である。広場の南寄りには建国の原点を想起させる人民英雄記念碑と毛沢東記念堂があり、そして北寄りに、毎朝国歌が流れる中での

国旗掲揚式が実施される掲揚台があり、その上で五星紅旗がはためく。

この、陳飛氏が北京の歴史についての講義で解説したような、幾多の変遷を経て成立した都市の基本構造を基に形成された大仕掛けの中で、共産党が領導する中華人民共和国が、悠久の歴史の上に成り立っているという正統性が示されつつ、一方で完全に新たな国家体制を作り上げ、維持しているのだということが印象付けられる。

北京に流れる「中華人民共和国の首都」としての「時間」

深思北京で私たちが過ごした、巨大国家中国の首都である北京は、終始どこか緊張感に包まれていた。抗日戦争と国共内戦を乗り越えた一九四九年十月一日、天安門に立った毛沢東が、湖南訛りで「中華人民共和国今天成立了」と宣言してから七〇年が経とうとしていたのだ。その中華人民共和国建国七〇周年にあたる国慶節がおよそ二週間後に控える中で、市内の警備体制はあからさまに強化されており、パレードの予行演習のために天安門周辺の道々が夜になると閉鎖されていった。あらゆるメディアが七〇周年に関する特集を組み、街の至る所に七〇周年を記念するポスターや横断幕が見受けられた。更に、私たちの北京滞在期間中の九月一二日には習近平が北京西北にある香山公園の革命戦士記念館を訪れ特別展示を視察した。香山は一九四九年前半に中国共産党中央委員会が半年間設置され、中央政治協商会議綱領が成立するなど現在まで続く中華人民共和国の基礎がつくられた場所である。一方、北京中心部から約五〇km南には、超巨大空港である大興空港が、建国七〇周年に合わせ開港を控えていた。街の至る所で「祝わねばならない」七〇年の時間とその間共産党が領導した結果としての成果が強調される中で、北京は、「建国七〇周年目」という時間を歩まされていた。

そもそも「中華人民共和国」の「首都」である北京は、常に現在の中華人

民共和国の政治的な時間と、一年を通して不可分である。

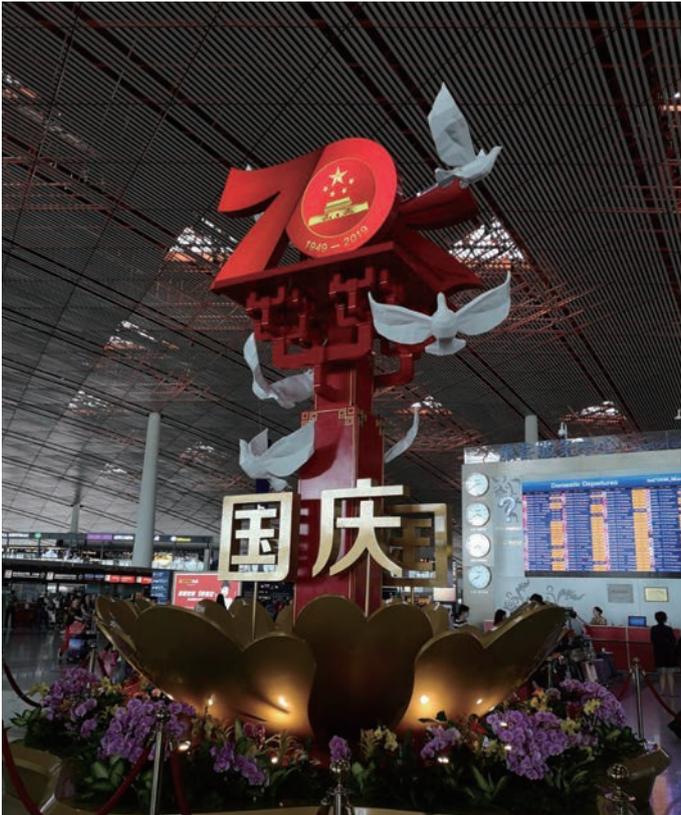
両会と呼ばれる全国人民代表大会と全国政治協商会議が開かれる3月には、中国全土から、特別行政区の香港・澳門や少数民族地区を含め、数千人の代表者が北京に集結する。北京中が厳戒態勢となる中で、取り分け人民代表会議では、政府の一年間の活動報告が行われ、経済発展の目標や重点施策、重要ポストの人事が発表されるなど、巨大国家中国の方針や状況を測り知る重要な機会として、期間中は世界中の注目が集まるといつても過言ではない。

両会終了後の二ヶ月は、「愛国」と「自由／民主」の間での緊張が訪れる、広く記憶される期日が続く。中国では事件や何らかの記念の日は、多くの場合その日付によって記憶されるが、その代表例としての、四五天安門事件の日、そして今年一〇〇周年を迎えた五四運動の日と三〇〇周年を迎えた六四天安門事件の日である。

五四運動は、北京大学紅樓や天安門前を始めた北京中心部で発生したが、列強の支配に対する民族的な抗議運動として、「中華民族」の復興という歴史に欠かせない場面となっており、五月四日には重要談話が発表されたり何らかの記念イベントが行われたりする。しかし一方で、「自由」や「民主」を求めた当時の声と現在の政治体制は一種の緊張関係にある。

そして両天安門事件の日はより緊張の度合いが増す。取り分け六月四日が近づくと、天安門広場周辺は重い空気に包まれていく。日常は続くが、広場を中心に警備や身分証チェックが強化され、インターネット上の言論規制は格段に強くなる。中国政府が政治風波・反革命暴乱と称するこの事件は、当日、私たちが泊まっていたホテルに近い、長安街の西側の方から鎮圧が始まったと言われる。公式の場での直接的言及が憚られるこの事件は、一方で確かに都市の記憶として北京に刻み込まれている。

その後は日本人として過ごすには、やや肩身の狭い期日が連続する。盧溝橋事件の七月七日、日本がポツダム宣言を受諾した八月一日、終戦記



北京首都国際空港に設置された、建国70周年を記念するモニュメント

念日とされる九月三日、柳条湖事件の九月一八日である。天安門広場の人民英雄記念碑には抗日戦争の犠牲者も祀られており、式典が開かれるほか、二〇一五年の九月三日には抗日戦争勝利七〇周年記念のパレードが長安街で大々的に行われ、中国と親しい各国首脳も参加したことは記憶に新しい。盧溝橋は北京南西の、五環と六環の間に位置し、現在は大きな記念館も建っているが、七月七日には追悼式典が開かれてきた。現在の共産党政権誕生の正統性、建国の物語が抗日戦争の勝利に依存しているところ、これらの期日に北京がどれくらい強度で反応するかは、時の内政、日中関係に左右される。戦争の記憶が残る土地として、そして公式の歴史の解釈をつくる中心地として、北京はこれらの記念日と不可分に進んでいく。そして一〇月一日の国慶節を迎え、再び年末へと向かっていくこととなる。

加えて、中国政府はいか年計画を筆頭に未来にわたる、長期的な目標を常に立てる。大きなものでは、中国共産党創立一〇〇周年の二〇二一年までに「小康社会」を全面的に完成させ、中華人民共和国成立一〇〇周年に当たる二〇四九年までに「社会主義現代化国家」を建設する、という目標が控える。こすひて、首都として政治的権力が集中する北京から、歴史をどのように記憶し、現在をどのような段階と位置付け、未来をどのように構想するかが決まっていく。北京はその担い手として、政治と不可分な緊張感のある時間を歩んでいる。

北京に流れる「改革開放以来四〇年を経た経済都市」としての「時間」

今年の国慶節と同じように昨年は、港澳珠大橋が完成する中で、改革開放四〇周年の成果が喧伝され、国家博物館では改革開放特別展が行われた。一九七八年に鄧小平が大坂の松下電器（現パナソニック）を視察し、その後松下電器は北京に第一号工場を建設した。南方ではなく北京を選んだのは、中央政府との意思疎通が円滑にいくからだという。松下電器の事例に代表される、日本が中国に技術指導した時代から、中国市場や日中関係は大きな変化を経た。そんな改革開放から四〇年を経た、今の北京には世界有数の経済都市としての時間が流れている。

中国の経済を長年支えてきた銀行から通信まで各産業の国営企業が北京に本社を構えており、国内に留まらず世界のマーケットを切り開こうとしている。更に、世界をリードするような研究を日々生んでいる北京大や中国科学院等の一流大学・研究施設がいくつもあり、産学連携が推進される中で、ユニコーン企業数は北京が深圳や杭州を抑えて国内で最も多くなっている。人民日報社が作成した短編動画シリーズの一つに「一分間、北京（一分間の間に北京で何が起きるか）」がある。その中で「一分間で、中関村科技園区は



次々と行き交う車の交通整理を行う警官

一〇〇九万元を売り上げ、一分間で、金融業は四七九・四五万元の営業収入を実現する』と紹介する場面がある。僅かな時間で大量の富が生まれ、「五年計画」のような政府主導の長期計画を余所に、各企業は短いスパンでの成

果を常に求められているのだ。一瞬でも早く取引を成立させたり、サービスを提供したり出来るかに心血が注がれる中で、時間は高度に細分化されていく。

一方で、現在中国経済は、「時間就是金錢、効率就是生命」のスローガンが象徴する加速度的に開発・拡大に邁進した高度経済成長期が一服し、環境問題や人口問題が表面化して、如何に持続的な発展を実現するか、というより長いスパンの時間を視野に入れる必要性が増している。その最先端を行っているのが、主に発電所の排煙の環境対策技術開発・提供を行う国能中電であった。

道いっばいの自転車に、人民服を着た単位へと向かう労働者が乗る三十年前の光景は、現在秒刻みで走る地下鉄に、私服に身を包んだ「企業」のオフィスへと向かうスマホを片手にした人々が乗る光景へと変化した。巨大な経済都市として、北京は忙しなく時を刻んでいる。

北京に流れる「歴史・文化都市」としての「時間」

現在政治経済の中心としたる北京は無論、古くから都市が成立し、この数百年間は、中華帝国の中心地であり続けてきた。そしてそうであるがゆえに、ヒトやモノが集まり、豊かな文化を育んできた。

深思北京のプログラムでは、北京が積み重ねてきた、無形の文化の数々に触れた。書法、紅樓夢を始めとした文学、崑曲、そして京劇。長い時間の中で、紆余曲折を経つつも各時代の担い手が、過去と対話しながら、常に自らを反省し、時に新たなものを加え、文化を鍛えてきた。その一つの大きな舞台が北京である。

斬飛氏は、北京戯曲評論学会が開いた「中秋雅集」の際の挨拶で、近年の文芸人の地位の向上を評価しつつも、今日の京劇のレベルは梅蘭芳の時代に

決して及ばないと辛く評価した。政治や経済が常に前進し、発展していくことが半ば強迫的に求められている今日の北京において、この常に自省し、緊張感をもって過去と対話し、過去に学ぶ姿は、むしろ新鮮にさえ映る。このような営みを行う文芸人が、北京の伝統文化を支えているのである。

一方で、北京には故宮、天壇、万里の長城を筆頭とした世界的に有名な文化遺産の他に、数多の貴重な寺院や公園、陵墓が存在する。私たちが訪問した唐代の仏教壁画を持つ法源寺もその一つである。北京城をかつて取り囲んでいた城壁は大半が取り壊され、環状道路となっているが、徳勝門などいくつかの門は今も残り、取り壊された門も地下鉄の駅名からその存在に気付くことが出来る。

そして、後海の近くには鐘樓・鼓樓がある。かつて一日にたった二回だけ鳴り、北京の人々に時を知らせ、その生活を規定したその鐘は、皇帝の「時間」に対する支配を象徴しつつも、当時の北京のゆるやかな時の流れを想像させる。

その鐘の音が鳴り響いたであろう、胡同の街並みが、宅地開発が郊外では急激に進む中においても、かつての姿を保ちながら故宮周辺に残されている。プログラム最終日の夜に胡同にある雲南料理店へ向かうと、その途中暗く細い路地の所々で、数少ない街灯の下に住民と思しき人が集まり、お酒を飲んだり将棋を打ったりしていた。そこには確かに、大通りから離れた夜の静寂の中で、政治の緊張感や経済の忙しなさとは無縁に感じる、ゆったりとした時間の流れる日常の空間があった。門で四方を囲われた四合院の中の、月明かりがよく見える中庭には、外から窺い知ることのできないが、「公」から隔絶された「私」の空間、時間があったであろう。このことは実は、その雲南料理店が、中庭に相当する部分に屋根こそあれ、四合院の構造を持っており、その夜奥の部屋で「無話不談」の雰囲気夕食を楽しむことを通じて期せずして私たち自身も体験したように思う。



中秋節の夜に鑑賞した京劇的一幕

加えて、幸運なことに今年の深思北京の日程は、春節、清明節、端午節と並ぶ重要な祭日である中秋節を含んでいた。街のお店は競って中秋節用の特製月餅を売り、人民大学等からの贈り物もまた月餅であった。そんな中秋節

の夜には、四合院を再現した文化施設の中で、自ら作った月餅を食べながら、満月の下、京劇の特別演出を鑑賞するという風流な経験をした。他方、故宫博物院の「万紫千紅―中国古代花木題材文物特展」では、各二十四節の景色が花を中心に描かれた展示があり、その季節に対する研ぎ澄まされた感覚と表現の豊かさに驚かされた。二十四節全てが今も人々の日常生活で意識されているとは言い難いが、気温の年較差が激しい北京において、一年の間に移り変わる季節を感じつつ、各節目の祭日で、家族で集まりながら、家族や祖先の安寧や豊作を祈る。その営みが毎年繰り返されていく。

長い歴史の上に成り立っているこの都市は、政治や経済や文化の時間が重層的に流れ、絡まり合いつつ、一年の中で様々な表情を見せてくれる。そして、それを繰り返す中で、伝統を引き継ぎつつ創造を繰り返し、新たな時間を編んで行くのである。そしてそんな北京に、私はひどくひかれるのである。

参加“深思北京”的意义在哪里

“曾在北京大学有一年留学经验的你认为参加这个项目的意义在哪里”。这是我参加此次项目选拔面试时被问及的问题。我一时竟然语塞，不知如何回答这个问题。

仔细想想，对于1996年出生在日本土生土长的我来说，和中国的相遇是充斥着一种负能量而开始的。毒饺子事件、西藏问题、领土问题、反日游行等等。另一方面，与此同时，中国的GDP超过了日本，源自中国的进口产品在日常生活中随处可见。

对于我来说，对于中国最初的关注焦点主要是国际关系、政治比较、战争的记忆方面。然而，为了更深入了解中国社会所独有的体制、思想的传承，我认为很有必要对中国的国内政治状况、社会所存在的各种问题进行深入思考，因此，我关注的焦点便转移到了中国国内。

从大一开始，便把汉语作为第二外语开始学习，在大三时开始了北大留学之旅。我从中国内部对中国社会进行了一次深入观察。在1年繁忙的日程中，用汉语上课学习，在中国走南闯北各处旅行，拜访了勒飞老师等北京戏曲评价学会的各位老师。同时，我也发现了中国社会中的多样性以及很多深刻复杂的难解课题。

“深思北京”把这个兜兜转转才接触和理解了中国传统文化的我引领到了一个全新的深度。

在燥热却座位爆满的教室里，听着昆曲；在中秋月圆的皎洁星空之下，边品味着新鲜月饼边欣赏着京剧。无论是从拥有着1500年悠久历史的法源寺的珍贵佛教壁画上还是作为古代皇帝的权力象征的古代大型建筑群的结晶的故宫上，都看出了中华文化的博大精深。在寺庙里陈飞老师讲述了北京的悠久历史、在四合院里徐玉良老师解释了书法的精髓、在书店里荃爰老师讲解了红学的精华，这些画面都仍让我记忆犹新。在各种独特的空间里，通过与文化人的不时对话，我感知到了文化人的丰富的智慧沉淀。

另一方面，在建国70周年国庆前夕，总感觉有一种紧张的氛围弥漫着这座拥有博大精深文化的北京城。在社会主义学院、中华文化学院里，我切实感受到了古代思想和社会主义思想融合下的现代中国所固有的课题。也回想起来在人民中国社里，王主编说的一句话，他说这里的工作是一份需要权衡好“智慧和良心的天平”的富有挑战的工作。在白总领导的国能中电、松下电器里，感受到了企业正在创造出全新的中国社会及其生活方式的那种蓬勃的朝气。政治经济文化纷繁复杂的北京，依然保持着其前进的步伐迈进着。

勒飞老师曾说过：“人和人的关系是很重要的”。东大某日本教授也曾指出：“中国是一个非常大、非常深刻多样的国家。‘我已经对中国很了解了’来作结论的话，实属盲目。”通过“深思北京”这个项目，我认识了很多的朋友，也相遇了一个全新的北京和中国。即使我在中国待很长时间，也觉得还是会有我没有看到以及对于北京、中国不曾了解的一面。这也就是参加本次活动给我带来的最大感触和收获。

(三浦骏人)

古都か？新都か？

増田 夏子



法海寺の暗闇の中にあった観音の絵（複製）。勿論本物は撮影禁止である。

北京には「古都」というイメージがあまりない。これは母方の実家が西安にあるからかもしれないが、古都というにはあまりにも新進気鋭で、あまりにも現代都市すぎる。「古都」というのは、もつと古都であることにアイデンティティを持ち、悪くいえば「歴史」に追いついていないものである。しかしそんな未練たらしきは北京には見えない。そう口にすればそれは現在でも北京が首都であるからだ、と言われるだろう。しかし、北京が「新都」か、というところもまた違う。明朝中期からと清朝の都で、歴史的観光資源も豊富にある北京はれっきとした古都なのである。

例えば北京市内石景山地区にある法海寺が歴史的に重要な寺院だ。明代に建てられた寺院で、樹齢何千年という古樹が数本あり、寺院自体も数度の改修を経て、現在にまで伝わっている。寺院自体は多少古びていたものの、一歩お堂に入ると、中が真っ暗だったのには驚いた。懐中電灯を持たされながら、薄闇に見えた黄金色の仏像に、なるほどこれはありがたいものだ、と思っただが、仏像は比較的最近に奇進されたもので、暗くしているのは実はお堂の目玉である壁画の退色を防ぐためであった。これもまた明代に描かれた壁画は六百年ものとは思えないほど、我々の目に鮮やかに写った。コの字型のお堂の壁中の絵を懐中電灯のぼうとした明かりがあちこちひらひらと飛ぶのが、蛍のように面白かったが、ガイドの説明が始まるとそれも止み、暗闇の中、ガイドの一つの懐中電灯の明かりを皆が目で追うのが、なにやら古代じみて面白かった。長年働いている彼が壁画についてこう言っていた。最初の十年ほどはありきたりな解釈しか持てなかった。しかし、「仏画だからといって、仏教のことばかりで解釈してはいけない。」と道教の専門家に言われ、道教の影響についても考えるようになった。「美しい花の絵だからといって、見てくればばかり見てはいけない。」とこれまた漢方の専門家に言われ、描かれている植物の効用についても考えるようになった。えらい和尚からは「ま

だ目に見える絵にばかり囚われている。」と叱咤されたが、最近この意味がわかった気がする。二〇歳の頃からここでガイドをしているが、新しい発見がまだまだあり、発見するたびにガイドとして皆と共有してみたりする、とのことだった。立派な生き方だと思った。

清朝の都でもあった北京だが、清朝の歴史的建造物に至っては、紹介するのも蛇足のような気がする。故宮博物院は、当時の清朝の紫禁城だし、清朝末期から民国時代の街並みも「胡同」として観光名所となっている。その時期の風俗は中国でもなかなか独特なものだったゆえにか映像化が多く、中国ドラマオタクな私にとっては、北京は垂涎の街、どこを見ても嬉しいのである。そんな数ある中でも、私にとって印象的な清朝ものといえば「紅樓夢」であり、ありがたくも今回は「紅樓夢」に接する機会も得られた。

といっても、清朝もののドラマセットを見たり、作者曹雪芹ゆかりの地に行ったりかではない。「紅樓夢」と聞かされて入った場所は、北京の中でも再開発中の新しい地区で、お洒落なカフェや最新鋭の施設などが軒を連ねている中の一軒のブックカフェだった。最初は「どう見ても場違いだろう」とかと思ってしまった。

「紅樓夢」は中国四大奇書の一つだが、同じく四大奇書の「三国志演義」、「水滸伝」や「西遊記」と比べると日本での知名度はイマイチである。なのでもちろん読破している者は少ない。だが、講演をしてくださった荃爰先生いわく、中国では知名度こそ抜群のもの、やはり読破している人は少ないらしい。この言葉に私は気を良くした。手前味噌ではあるが、日本の大学生で読破している者はそうはいないだろうと自負していたものが、まさか本国でもそうだと！しかし、先生の講義が始まると同時に私は絶句した。先生は作者曹雪芹の生い立ち、登場人物の姓や名の掛け言葉、ところどころに挿入される詩の解釈などからの解釈を講じ始め、物語についてはごくごく一部しか触れ



紅樓夢の授業を受けているところ。カフェの一角にこのような講義スペースも。

ずにいた。

先生がいうには、まずこの話は「情」の物語である。しかし、情から如何にして無情になり得るのかという物語でもある。情というものは厄介だ。情に万事任せるようになる人間扱いにくくなり、他者からも敬遠される。かといって情を捨てようにも人間捨てきれないものだ。主人公の賈宝玉も林黛玉も情で生きていた。しかし情に身を任せすぎた結果、紆余曲折あり、悲劇が生まれる。彼らは情を激しく動かされる。そしてその結果として無情に至る。つまり、究極までの激情無くしては、無情へとは発展しないのだ。云々。

はつきりいって、私の「紅樓夢」に対する価値観は一変した。当初から私の興味は、女の子が顔を洗った水で自分もまた顔を洗いたがり、女の子を拝み倒して髪を結ってもらう女好きな賈宝玉、すぐに「死ぬ」と言い出したり、泣き出したりするメンヘラな林黛玉など登場人物の面白エピソードにばかり向いており、また訳書を読んだ弊害か詩やセリフの言い回しによくよく注目して読んだためしはなかった。しかし何よりも、一小説を、まるで哲学書かのように語り、その中から人生観を引き出す、ということに何とも言えない衝撃を覚えた。

今回の北京研修は驚きの連続であったが、私は上記二つの行き先を特に紹介したかった。それは勿論これら二つが特に興味深かったからに他ならないが、今回の北京研修を始め、私の中国理解の浅さを露呈させてくれるものでもあったからだ。

私は幼少から中国語を勉強していたとはいえ、中国滞在経験はない。たまに旅行で会いに行く祖母に向かって話す程度だ。だから中国語は身に染み付いた言語ではあると同時に、実際に使用する言語とは少し乖離した印象を受けるものだった。特に幼児期に習った漢詩や中高時代の漢文の印象が強いため、古代の文人ばかりが私にとって最も親しみ深い中国人だった。しかし、

我々が日本で学ぶ「中国」はあくまでも中国の一部分でしかない、ということが今回の北京研修で知れた。北京は他の大都市に遜色のない現代都市だった。街のいたるところに貸し出しの自転車があり、老若男女みなスマホを片手に歩いている。あの古き良き故宮博物院の入口にまるで出国時にするような、身分証やパスポートのセキュリティがあった。私たちの研修期間がちょうど新中国70周年を祝う国慶節間近だったことから、夜に警察が「シャツ短パンの人にすら職質をする。中秋節には寺院は自撮りに明け暮れる人で溢れかえっていた」。しかし、そんな中にも京劇に打ち込む少女、京劇の役者を象ったスマホケース、昆曲の授業に殺到する人々の姿もたしかにある。それら全てが文化交流という生きた人々との面と向かった交流であるが故に気づけたものでもあった。

故宮博物院や万里の長城で有名な北京は、実際に行ってみると「古都」としては物足らない街かもしれない。ただ法海寺の暗闇の中の壁画のように、「紅樓夢」に隠された人生の哲学のように、表面的な北京だけでは見えにくいものが隠されていた。今までにあった歴史上全ての文化を、目にそのままにとどめおこうというのは無理があるが、その中でも残った一部や、面影を残すものから微かな香りを楽しむことは出来よう。明朝にまで遡る中華帝国は、建国70周年を祝う新中国は同時に北京に存在していた。中国のどこもかしこもが発光を遂げる時代だが、それは一文化の終焉では決してなく、過ぎ去っていった時代はまるで地層のように、表面に表れず、隠れているだけだと思いたい。そんな街のあり方を体現しているかのような北京は「新しい古都」でも、「古い新都」でもないのだ。

法海寺の壁画を単に仏画として見てはいけなわけではないし、「紅樓夢」という物語文学を単なる作り話として解釈してはいけなわけではないように、北京を観光地の「古都」として、もしくはGDP世界二位の国の「新都」

として見ることはそれぞれできよう。しかし、多くの目線で見ればより多くのものが見えてくるのに一つの観点に固執しては勿体無い。私の中国に対する理解は表面的な解釈にとどまっていた。群盲象を語るように、私は中国の一部分一部分を触ってみては喜んでばかりでいた。そして、触った一部分一部分をそれぞれ別個に考え、本来連綿たる中国の歴史や風俗を、決して一匹の大きな象としての解釈をすることができていなかった。今回訪問した北京はどこかしこも新しいが、今はなき北京の面影が見えた。それは今回北京研修をすでに終えた私の中に、北京で学び、はしゃいだ私がいるように、前面には出ていないが存在しているのと似ている。古さと新しさは北京に混在している。それはこっちの街角は新しく、もう一方は古いというようなものではなく、どちらも本当に存在しているのだ。



新中国70周年に沸く北京。市内は厳戒態勢だった。

「深思北京」Ⅱ 「深思人生」？

今回の北京研修の参加者には各々目的があった。というよりも、目的意識がないといけなかった。それは研修前から、研修に参加するにあたっての心構えとしても聞かされていたし、研修前のさまざまな下準備、研修中に目まぐるしく起こる色々な出来事への対処などから半強制的にも持たざるを得ないものだったともいえよう。つまり何らかの意志や目標を持ち続けていないと、ふと自分が何をすればいいのか、何をしているのかを問いたださざるをえない旅だった。そしてもちろんわたしにも目的があった。幼い頃から中国語を学んだ身としては、来年に就職を控えたこれからもっと中国との交流を保ち続けたい、と思っている。しかし社会人として単なる観光にとどまらない交流を持つには自分はあまりにもおぼろげな中国語しか使えない。そこでこのプログラムのような、より公的な空間を体験でき、中国での「お作法」を習得できそうなものを選ばせてもらった。この「お作法」を私が身につけられたかというところは言えなく、何も実りがなかったとは言いがたいが、「お作法」については身につけるといよりは、むしろ「垣間見た」くらいがふさわしいような気がする。

しかし旅の途中から、もっと深く中国人の生活に入ってみたいだとか、もっと深く中国での「お作法」を身に付けたいだとか、そういう目的意識を持って臨むことに違和感も抱き始めた。勿論それを果たすことに意味はあるが、中国に行き、これは興味深い、あれも面白い、などと異国人気分だけで腹が膨れているようでは、仕方がないとも思った。相手は中国人で、我々は日本人であることは違いない。言語が違えば思考も多少は違い、歴史や風俗が違えば思考は大きく違う。しかし、それも結局はとても表面的なことでもあると知った。中国に固有の礼儀はあれど、こちらが愛想よく、折り目正しく、多く会話をするに越したことはない。言語の壁があろうともこちらが伝えようと思ったり、隣で歩いたり、写真を取り合ったりすることの方が重要なのではないか。

これは勿論中国の「お作法」や中国語でのコミュニケーションを軽視するものではない。むしろそれらを重視しすぎてきたのではないか、という疑問である。それらを知り、理解し、実践することは重要だが、それ自体が目的ではない。相対する場合は、私たちがどれだけ中国のことを理解しているかのお披露目する場ではなく、あくまでも人と人との相互理解が重要な場なのである。

旅に目的意識は重要である。この時代、ともすればどこに行こうとも携帯電話をいじり続けることで一日を終えることができる。だからこそ、このようなことをしたい！という目的は重要だが、それに縛られてもいけない。もっと深く考えることが肝要だ。今回の「深思北京」は、そういう意味では私の「深思人生」にもつながっているのかもしれない。

(増田夏子)

北京の伝統文化「戏剧」
（俳優と演奏員・観客・研究者）



「戏剧」の舞台の様子。

頃安 美咲

「序論（「戏剧」…俳優と演奏員・観客・研究者の三者における人口不足）」

二〇一九年度の深思北京研修は幸運なことに、中国一大イベントの一つである中秋節の時期にあたっていた。中秋節の節食として月餅、新酒や新果が挙げられ、現代では家族の団欒を願うイベントとなっている（曹、二〇一〇）。私たちもこの中秋節の晩餐会に参加することができ、京劇の鑑賞とともに節日の慣習を経験することが叶った。この盛大な晩餐会を含め、一週間を通じて私たちが様々な方と談話する機会が多々あった。そして、現地で活躍される方々や学生の話聞いて見えてきたのが「戏剧」を取り巻く状況だった。実際に地方劇の視察をした北京大学の学生による発表を通じて「地方劇の研究者の重要性」を感じた。その日の夕方、北京大学で昆劇役者による公開授業に参加した際には、語ってくれた役者の方が幾度となく「今日は若者が多く来てくれて嬉しい」と仰っていたのが印象的だった。若者の伝統文化離れは北京でも起きていることが伺えた。観客サイドの若者離れを感じた一方で、私たちが実際に鑑賞した劇の中には学生によるものもあった。彼らがいかにして京劇の舞台を選んだかについて私が尋ねたところ、「経済的に裕福な家庭であれば、子供達にこのような苦労までさせて京劇に携わらせることを選択はしないだろう」という回答を得られた。この正鵠を射た意見を聞いて、俳優と演奏員の養成制度も「戏剧」の存続と発展に多大な影響を及ぼすことを感じた。これら北京研修で見聞したことを踏まえ、俳優と演奏員・観客・研究者の三者における人口不足が「戏剧」の直面する課題だと認識した。

中秋節というイベントをこの上なく盛り上げた「戏剧」が今後とも発展していくことに寄与すべく、本論においては、現地での経験を織り交せて、「戏剧」の直面する課題とその取り得る解決策を提示していく。

二一 本論（課題と解決策）

本論文において「戏剧」は深思北京研修で触れた京劇と昆劇、その他地方劇の共通するところに焦点を当てることとする。京劇は、「中国の代表的な古典劇」であり、「北京を中心に発展したことからこの名でよばれ」ている（城谷、二〇〇八）。清代に安徽省の劇団である徽班と湖北省の地方劇である漢劇が融合してできたものである（川島、二〇一六）。また、昆劇に関しては、「十四世紀半ば、江蘇省蘇州市の東部の崑山で誕生した地方劇」であり、「なめらかで優美な旋律と、文学的に洗練された脚本の魅力によって、全国的な文人階級の演劇」であるとされる（加藤、二〇〇九、一三三頁）。四川省の川劇や桂林市の桂劇についても学ぶ機会があったが、これら地方劇の抱える問題は地方劇特有のものを含む。地方劇は、地域に深く根付いた「戏剧」であり、方言語彙を多用しているため、若者にとっては一層理解を深めることが困難となっていることがその特徴の一つとして挙げられる（川島、二〇一六）。

「戏剧」の未来を捉えるに当たって、当事者となる俳優と演奏員・観客・研究者の三者の視点からそれぞれの課題と解決策を述べていくこととする。

二一 俳優と演奏員

まず「戏剧」の俳優と演奏員について検討する。本研修で演じてくれた若手の俳優と演奏員は中国戯曲学院附中、北京京劇院優秀青年に所属する方々だった。中には二十一世紀生まれの子どもも含まれ、「戏剧」の明るい未来が期待される。その一方で、近年中国において日本の後を追うかのようにして社会問題として浮上しているのが少子高齢化である。日本においては、文部科学省（二〇一五）が平成25年度文部科学白書の特集において、「人口減少社会が到来し、特に地方においては過疎化や少子高齢化等の影響、都市部においても単身世帯の増加等の影響により、地域コミュニティの衰退と文化

芸術の担い手不足」への懸念を提示している。中国においても少子高齢化の影響が「戏剧」の領域においても少なからず及ぶと考える。

「戏剧」の直面する担い手不足という課題に対して以下の2つのアプローチを提案したい。①俳優と演奏員の伝統演劇養成機関の見直し②高齢者の役割の再確認、の二つである。

①俳優と演奏員の伝統演劇養成機関の見直し

中国戯曲学院を始めとする教育機関の概要を把握する。中国伝統演劇の伝承教育は、中華民国期ごろまでは徒弟教育という形がとられていた（有澤、二〇〇三）。現在では、京劇の俳優は、子供の頃から一定の役柄を専門的に学ぶことになっており（魯、二〇一二）、俳優と演奏員はともに十歳前後で専門の学校に入り、教養としての京劇の知識と実演の双方を学び、全寮制の生活をスタートする。

陝西省西安市の秦腔という地方劇の養成機関に着目した清水（二〇〇七）によれば、当機関には「生活指導系」の教師がおり、彼らが「生徒に金を貸すことから、生徒のなかに貧農の出身者がかなりいるらしいこと」が分かる。養成機関に通う子どもたちへの経済的援助として奨学金制度の充実化が求められていると考える。

②高齢者の役割の再確認

少子高齢化は経済に与える負の側面に焦点が当てられ、子供の数を増やし、増加する高齢者への対応を考える場合が多い。今回の研修で訪れた北京市における高齢化については、北京市老齡事業發展・養老体系建白書（二〇一八、四頁）によれば、二〇一七年の北京市の戸籍を持つ六五歳以上の高齢者が二一九・八万人となり、北京市の戸籍を持つ人口の一六・二を占める。すでに高齢化率が15%を超えており、北京市は高齢社会となっている。

しかしながら、駄田井(二〇一〇)は少子高齢化社会への対応について、経済力ではなく文化力に着目し、文化力を向上するための高齢者の役割として人生経験の伝達と伝統的生活文化の継承を挙げている。高齢となった俳優や演奏員に限って言えば、彼らに求められる役割はこれまでの経験を伝統演劇学校の学生たちに語り継ぐことだと考える。北京大学の公開授業をした二名の俳優は「戏剧」の教育過程にある者にとって大先輩にあたり、二名の伝統演劇学校での経験談は学生たちへの叱咤激励に貢献できるだろう。

二二 観客

次に「戏剧」の観客について検討する。観客の中でも若者に焦点を当て、いかにして若い世代の観客を増やすかについて考察したい。

「好！」という喝采と拍手を時折混ぜながら、鑑賞を楽しむ観客に若者が少ないことは周知の事実となっている。実際、川島(二〇一六)は「目覚ましい技術革新によって無数の視聴覚娯楽が世に溢れ、これが大多数の若者の支持を集める一方、古色蒼然たる伝統地方劇に対する若年層の興味は確実に低下しつつある」と指摘している。これは京劇、昆劇においても同様だと言えよう。

また、鄭(二〇一四)は昆曲が若者にとって廃れたものだと言えられることに危機感を覚え、「让大学生与中学生有起码的接触，让他们对中国文化传统的表演艺术有点认识」と述べ、若者たちが中国の伝統文化に触れる機会の重要性を訴えている。

そもそも、若者たちが「戏剧」に触れる機会はあるのだろうか。若者たちが「戏剧」を始めとする伝統文化に関心をもつことを促すべく、中国教育部は二〇〇八年から学校の授業に京劇を導入する試みを実施している(祝斌、二〇〇九)。対象都市は、北京、天津、上海などの十都市であり、「北京市内



「戏剧」を楽しむ様子。

だけで、高校、小学校二十校に十五作の演目を教えることになった」とある。「戏剧」に触れる機会があってもその後の人生で興味が薄れていく若者が少なくないと言える。

これらの現状を踏まえ、若者の関心を引きつけ、若年層の観客を増加させるための解決策を講じることとする。ここでいう若者は楊雲玉(二〇〇八、九頁)の著書『青年族群對傳統戲曲「京劇」的觀賞行為』に提示される中華人民共和国における定義の上限下限年齢に倣い、十四歳〜二十八歳前後を想定する。若者といっても個々人の関心領域は異なり、「戏剧」に対する理解度も千差万別であり、十把一絡げに捉えて彼らへのアプローチを考察するのは適当でない。ここでは、若者の中でも「戏剧」にある程度以上の関心を持つ者と全く無関心な者の二分類とする。前者に対しては①「戏剧」を観る方法を提示し、後者に対しては②「戏剧」を知る方法を考案する。

①「戏剧」を観る方法

まず、ある程度の興味はあるものの、観客として「戏剧」を鑑賞できていない若者層の現状について、「戏剧」を観るための要素となる、チケット料金と上演時間と場所という三つの側面から考察する。まずチケット料金については、梨園劇場を例に挙げると、座席により価格に幅もあるが、二〇〇、五八〇元となっている。割引価格が適用されれば最安八〇元で購入することも可能となっている（北京梨園劇場、二〇一九）。一方、北京市内の平均収入は日本貿易振興機構（二〇一八）によれば、「都市部の非私营企业（国有企业、株式会社、外資系企業など）の従業員の年間平均賃金は十三万七〇〇元」となっている。また、二〇一七年の日本の民間給与平均が四三二万円（国税庁、二〇一八）に対して歌舞伎の座席料金が三階B席で四〇〇〇円（チケットweb松竹、二〇一九）である。以上の数値データから日本での歌舞伎と北京での京剧鑑賞にかかる費用とを比較すると、京剧鑑賞のためのチケットは割安だと判断できる。さらに、上映時間帯にも考慮したい。再び梨園劇場を例に挙げると、毎晩九時三〇分から八時四〇分となっており（北京梨園劇場、二〇一九）、夜に講義のある学生や残業する社会人を除けば鑑賞可能な時間帯となっていた。そして、場所に関しては京剧の専門劇場として、（先ほど例に出した）「梨園劇場」を始め、「梅蘭芳大劇院、国家大劇院、長安大劇院、湖広会館」などが挙げられ、北京市内に関しては観劇する場所には困らない（魯、二〇一九）。

チケット料金と上演時間と場所という三つの側面について検討したが、とりわけ若者たちが観る環境の阻害要因は見当たらなかった。では、彼らが鑑賞に対してより気軽さを求めているとすると、TV等のメディアの活用を一層進めていくことが考えられる。現在 CCTV11（二〇一九）の番組表ページにおいて「回看」のボタンからウェブ上で無料視聴が可能となっている。ウェブでの鑑賞は「V」広告を飛ばすことはできず、もちろん生で観劇することの

足元にも及ばないが、時間や場所に縛られず鑑賞ができるという点で若者のニーズに合ったサービスだといえる。



学生との交流の様子。

以上に述べた便利なサービスに関しては、ウェブ視聴は全ての番組で対応可能となっているがゆえに、若者にとってはどの時間帯の録画を鑑賞すべきか判断しかねる恐れがある。そのため、本ウェブページにおいて若者に対するおすすめ度合いの表示をすることで彼らの効率的な視聴を可能にする必要があると考える。

②「戏剧」を知る方法

他方で、「戏剧」については学校等で触れる機会があったものの、そもそも関心がなく鑑賞することを考えていない若者層に対するアプローチとしては内容面の伝達方法の改革を提案したい。今回の研修を通じて、「戏剧」の奥ゆかしさを鑑賞するためには事前知識の必要性を痛感した。言語的な障壁はもちろんのこと、古典文学や楽器への自分の理解不足が「戏剧」の面白さを半減させている気がしてならなかった。自分の率直な感想を現地の方に伝えたところ、「芸術を楽しむために事前に学ばなくてはならないというのは非合理だ。ありのまま味わった上で学んでいけば良い」と仰っていた。そして、伝統芸術としての魅力以前に、上演される物語の内容自体が若者の関心を引きつける必要があるとも述べられていた。歴史ある伝統文化を前に身構えてしまう若者との間に生じている垣根を超えるべく取りうる手段として、若者文化へ譲歩することも得策だと考える。映画宣伝広告を模倣した宣伝をし、「戏剧」の上映ストーリーをわかりやすい言葉でまとめたものを添える。また、多くの若者が追っているアイドルと「戏剧」での役者が同じ類の存在へと変容させる方法もあると考える。舞台での役者の姿と普段の姿とを公開することで、若者の観るドラマに近い形の存在となれると思う。そして、無関心だった若者を一度「戏剧」の世界に引き込むことができれば、先に述べたようにウェブ視聴の改善アプローチで彼らの関心を継続させるアプローチへと移行することが可能だと考える。

二二三研究者

最後に「戏剧」の研究者について検討する。伝統文化の継続と発展のために研究者は欠かせないと考えるが、研究員不足が危ぶまれる状況だと考える。そのため、大学での研究状況を踏まえ、「戏剧」に貢献すべく研究体制をいかにして拡大すべきかについて考察したい。

①国内外の大学で「戏剧」課程の設置

北京大学では「経典昆曲欣賞」という授業が開講されている。この授業の内容について、叶朗・湯旭梅(二〇一四)は以下のように述べる。本授業は二つの要素からなっており、一つは中国芸術、中国美学と中国戏剧の観点からの紹介であり、もう一つは、白先勇らが新しく創造した「牡丹亭」の読解である。このような「戏剧」課程が大学で正式に設置されている例はいまだに稀なものにとどまっている。

さらに海外の大学で同様の授業や研究過程を導入することを検討したい。すでに、ニューヨーク州立大学ビンガムトン大学では「京剧の孔子機関」というNPOがあり、この期間はビンガムトン大学にて講義やワークショップ等を開催している(Binghamton University Confucius Institute of Chinese Opera, 二〇一九)。このように海外へも「戏剧」過程を普及させることにより、人でも多くの研究者が誕生することを期待したい。

②研究者・俳優と演奏員間交流の活性化

人民大学で受講した講義の一つで先生は「役に立たない文学をなぜ学ぶのか」と学生に問いかけていた。吉見(二〇一六)は、「役に立つ」というのは手段的有用性の次元と価値創造性の次元があり、文系の知というのは長期的に役に立つものだとしている。「戏剧」の研究も「戏剧」という伝統を支える上でその有用性は長い目で見て判断されるものだと考える。

しかしながら研究には長い時間を要するがゆえに結果が見えにくいところもあり、キャリアとして研究の道を選ぶ学生が多くはないのも事実だ。人民大学で出会った文学を専攻する大学院二年生の学生の話によれば、難易度が高まるとともに研究結果をできる限り早く出さなくてはならない制度を苦手に感じ、卒業後は博士課程へと進まずに就職の道を選ぶとのことだった。これはほんの一例に過ぎないが、研究に対するやりがいや「役に立つ」実感が得られる体制は重要だと考える。

そこで、「戏剧」の最前線で活躍する俳優と演奏員らと研究者らの間での交流の機会をより多く設けることで、研究者サイドにとっても実態や成果を目に見える形で捉えられる制度にしたい。今回の研修では、晚餐会等を通じて双方が同席する場面もあったが、若手研究者にも同様の機会が与えられることを願う。

二 結論

以上「戏剧」の課題と解決策について、俳優と演奏員・観客・研究者の三者の立場から検討してきた。まず、俳優と演奏員に関しては、少子高齢化による担い手不足という困難に直面する中でも、「戏剧」伝統演劇養成学校の見直しと高齢者の役割に活路を見出すことを提案した。次に、観客に関しては、若者層に着目し、「戏剧」を観る方法と知る方法の双方での改善策を提示した。最後に研究者に関しては、国内外で研究機関設置をするともに、研究者が「役に立つ」学問であるとの実感を深められるべく、俳優と演奏員との交流機会の促進について考察した。

大阪万博「太陽の塔」の制作者でもあった岡本(二〇一一, 四三二頁)は、「伝統なしの創造はない。しかしまた創造ぬきの伝統はない」と述べている。中秋節の時期に私たち研修生が出会った「戏剧」という北京ないし中国の伝統

においても、それが繁栄し続けるために、俳優と演奏員・観客・研究者の三者において創造することが求められていると考える。

【参考文献】

【日本語】

有澤晶子・伝統演劇学校の成立とカリキュラム構成…中国戯曲学院を中心として・カリキュラム研究・2003・12・p.29-42.

https://uni.ac.jp/lognavi?name=js&lang=ja&type=pdf&id=https%3A%2F%2Fdoi.org%2F10.18981%2Fjcs.12_0_29&naid=110009357528. (参照 2019-09-22).

岡本太郎・「伝統と創造」・伝統との対決・山下裕二・榎本野衣・平野暁臣・東京・筑摩書房、2011, p. 431-433. (岡本太郎の宇宙3).

加藤徹・梅蘭芳世界を虜にした男・東京・ビジネス社、2009, 250p.

川島郁夫・中国伝統地方劇の諸相—京劇・昆曲・越劇…・古典演劇の昔と今・東京外国語大学総合文化研究所、2016, 76-82.

城谷浩・中国を知る本③文化 四書五経から美術・音楽まで・東京、日外アソシエーツ、2008. p.277-278.

国税庁・「平成29年分民間給与実態統計調査結果について」, 2018. <https://www.nta.go.jp/information/release/kokuzai/cho/2018/minkan/index.htm>. (参照 2019-09-22).

清水拓野・「秦腔の俳優教育の広がる教育格差が示唆すること——唱念教育の学校化の特徴と展開

に注目して”。地域研究・2017, 17, 1, p. 23-42. <https://www.jias-review.net/17-01-34-42/> (参照 2019-09-23).

清水拓野・徒弟制教育研究からみた現代中国の伝統演劇教育・秦腔の俳優教育における師弟関係の分析を中心に・演劇研究センター紀要Ⅷ 早稲田大学 21世紀 COE プログラム・2007, 8, p. 163-176. <https://core.ac.uk/download/pdf/144457803.pdf> (参照 2019-09-23).

祝斌・京劇の学校科目化：政治権力は生徒の心に介入できるか・excite ニュース・2009. https://www.excite.co.jp/news/article/Searchina_20090114023/ (参照 2019-09-22).

曹述燮・中秋節の来歴とその慣習・愛知淑徳大学論集・文化創造学部・文化創造研究家篇・2010, 10, 17-30.

チケット Web 松竹・歌舞伎座 秀山祭九月大歌舞伎・2019. <https://www2.ticket-web-shochiku.com/ticket/varef.do#> (参照 2019-09-22).

日本貿易振興機構・北京市の2017年の年間平均賃金は前年比9.8%上昇・2018. <https://www.jetro.go.jp/biznews/2018/06/06defa3eada96a8.html> (参照 2019-09-22).

吉見俊哉・「文系学部廃止」の衝撃・東京・集英社新書, 2016, 254p.

魯大鳴・京劇の舞台・京劇役者が語る京劇入門・東京・駿河台出版社, 2012, p. 40-59.

魯大鳴 中国京劇小事典・東京・駿河台出版社, 2019, p. 120-123.

*特集 1 2020 年に向けた文化政策の戦略的展開・文部科学白書平成 26 年度版・文部科学省,

2014, p. 4-17.

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/npab201501/1361011_005.pdf (参照 2019-09-22).

【中国語】

北京市老齡事業發展・養老体系建白書 北京市民政局・2018. http://mzj.beijing.gov.cn/attached/file/20181026/20181026140555_117.pdf (参照 2019-09-23).

北京梨園劇場・北京梨園劇場門票・2019. <http://www.liyuanjingtju.com/index.htm> (参照 2019-09-22).

楊雲玉・青年族群對傳統戲曲「京劇」的觀賞行為・台北 秀威出版, 2008, p. 9.

叶朗・汤旭梅・从文化传承和美育的视角看昆曲进大学校园・昆曲欣赏读本・陈均・贵阳・贵州出版集团, 2014, p. 58-70.

郑培凯・昆曲在 21 世纪的文化定位・昆曲欣赏读本・陈均・贵阳・贵州出版集团, 2014, p. 44-53.

CCTV. “CCTV 节目官网”. 2019.

<http://tv.cctv.com/epg/index.shtml?spm=C28340.P2q07O8QILcd.S87602.3&date=2019-09-17> (参照 2019-09-22).

【英語】

Confucius Institute of Chinese Opera. “BINGHAMTON UNIVERSITY STATE UNIVERSITY OF NEW YORK”. 2019.

<https://www.binghamton.edu/organizations/confucius-institute/index.html> (参照 2019-09-23).

お茶屋のおばさん

『那么，你们这一周都玩儿的怎么样？』

最終日の自由行動で出会ったお茶屋のおばさんに聞かれた。北京馬連道茶城の中でお茶を淹れてくれたおばさんだ。

『我们去了北大，人大等等，』

少し答えに詰まっているとおばさんは立て続けに北京の観光地を挙げて聞いた。

『长城去了吗？』『没有』

『颐和园呢？』『也没有』

『圆明园去了吧？』『那儿也没去』

おばさんは苦笑しながら『你们到底都去了哪儿呢？』

不思議がるのも当然だ。私たちは観光に来たのではなく深思北京―北京を深く思考すべく訪問したのだから。

今回の訪問を通じて、私は長年の自分の問いに対する新しい回答を得た。その問いとは「なぜ中国について学ぶのか」である。小さい頃からずっと母親が中国出身だから、親戚に中国人がいるから中国のことを学ばなくてはならないと思っていた。中国語も自然と身についた面もないとは言えないものの、やはり他人から見れば出来て当たり前だと思われかねないから勉強している自分がいたと思う。中国の年間行事や伝統文化、食事や方言なども生半可な知識しかもっていないにも関わらず満足してしまっていた。

人民大学で受けた授業の一つで先生がこのように生徒に尋ねていた。『为什么我们要学文学呢？』私たちが訪問したのは九月の始め。新学期のガイダンス授業であったこともあり、まずは学ぶ意義について考えることから授業はスタートしていた。私が直面していた質問は「中国の」文学」以前に「中国」そのものだった。

学ぶ理由に対して私が今回新しく得られた回答は単刀直入に言って、「純粹に中国が好きだから」だ。厳しく指導された書道も中国の書道を学ぶ貴重な経験となった。生け花も中秋節らしく、夜空に浮かぶ月から兎が飛び出す情景をなぞらえた作品を作ることができた。京劇等に対してはCCTV11チャンネルでいつも上映されている印象が深かったが、実際に演じていらつしやる方や研究されている方に直接お会いしてお話もでき、みなさんが熱い想いを持って携わっていることを学べた。劇の内容を教えて頂いてからは、内容自体にも面白さを見出すことができた。紅樓夢の諧音をもっと知るべく、早速本を購入して

読み始めるという行動力を発揮できたのも先生の講義があつてのことだ。

北京の文化を思う存分学ぶことのできたこの一週間を通じて、自分が日本と中国のハーフに生まれたという偶然は、私に中国に関心を持たせるきっかけはなつたが、中国を好きになつたのは他でもない私自身であることを実感した。一週間、先生方を始め、友人や現地で出会った様々な方々に支えられて本当に充実した日々を過ごすことができた。同時に、深思北京は北京だけで行われるものではなく、日本に戻った今も続くことをここに記す。素人レベルの知識を少しでも精通したものへ発展させられるよう中国語で中国を学ぶことを続けていきたい。

冒頭のお茶屋のおばさんとの会話には続きがある。

『没事儿，北京和东京这么近，肯定有机会再来。下次再到这次没去的地方也行。』

『是的。』

おばさんのアドバイスを聞き入れながらも、次回もまたメジャーな北京観光地は行き逃すような予感がすでにしていた。北京の人々の日常の生活から読み取れる背後にある歴史や文化から学ぶことが多々ある。観光地に行く時間の余裕があるとは到底思えなかつたのだ。

『日本也过中秋节吗？给你月饼。吃吧。』

この月餅はここ一週間で頂いた中で何個目になるだろうか。頂いたまん丸の月餅を見つめながら私はもっと中国文化について貪欲に学んでいく意思を固めた上で、ペロリと平らげたのだ。

(頃安美咲)



写真①二環の立派なショッピングモール、ホテル

温
可
迪

なぜ貧富の差か

私は、今回の研修で、北京における貧富の差について考察した。以前から、北京の貧富の差については、「北漂」や「蟻族」といった言葉を耳にしたことがあり、問題となっているとの認識は持っていた。しかし、日本においてよく取り上げられる中国の貧富の差は、東西や内陸と沿海地域といった地域間格差についてのものが中心であり、都市内部の貧富の差が取り上げられることは少ない。そのため、その実態について知る機会はあまりなかった。そこで、今回は実体験等を基に、北京の貧富の差について考察した。

北京で見聞きした現状

まず、研修中に見聞きした北京の現状についてである。北京首都空港から市の中心部に向かうバスが走るのとは日本と同様によく整備された高速道路であったが、木々が立ち並ぶ区間もあり、環境に配慮した街の整備が行われているように感じられた。三環以内の地域をバスで通ると、立派なホテルやショッピングモール（写真①）が多くみられるようになり、人々にぎわっていた。住宅は整然と立ち並び、川沿いに植えられた柳の木が風で揺れる様子は、現代都市の秩序と中国固有の風情を感じさせるものであった。これらの様子から、北京の近年の経済や都市整備など各面における進歩と発展が見取れた。

しかしその一方で、街を走る車には老朽化してペンキが剥げた三輪車なども交じり、そのような車の多くは日焼けした比較的色彩黒な中年の方が運転していた。また、二環を通る際に、立派な四合院が立ち並ぶ中で（写真②）、老朽化した四合院が集中する区域が見受けられた（写真③）。これらの老朽化した四合院は一つの建物が大きくても、ドアが大量に取り付けられており、

建物の間の通り道は人々が行きかっていることから、様々な年齢層の方が共同で居住しているようであった。また、四環や五環の地域でも、計画的に整備された大規模な住宅地やショッピングモールが立ち並ぶ中で、突如老朽化した低層の建物が集中する（写真④）という奇妙な風景が見られた。今回の研修では時間の関係上、実際に中を訪ねることはできなかったが、研修中にお会いした先生方やこれらを実際に訪れた人民大学の学生によると、このような老朽化した建物の生活環境は極めて悪く、トイレや浴室が整備されていないために公衆トイレや公衆浴場を使用しなければならぬものがあり、衛生状態も良くないようである。さらに、これらの地域は周辺の繁栄した一方とは隔絶され、周辺地域との教育格差なども深刻であることから次の世代の貧困状態脱却が困難な状況にあるらしい。

また、六環の地域では、道路が舗装されておらず、古くからの農村の雰囲気を保った地域もみられた（写真⑤）。今回の研修では六環よりさらに外の郊外の地域を訪問する機会はなかったが、六環の状況から、さらに開発が遅れ



写真②二環のよく整備された四合院



写真③老朽化した四合院



写真④大規模なマンションとそれに隣接する老朽化した低層の建物



写真⑤道路が舗装されておらず、古くからの農村の雰囲気を保った住宅

ている郊外の地域の状況についても推察できるように思える。

このように、北京の郊外の地域と市の中心部でも著しい貧富の差があるが、今回は紙面の関係上、前述の五環内で見受けられる市の中心部周辺における貧富の差、特に住宅問題を中心に考察を加える。

中国における事情

上記の状況を踏まえ、中国における事情について調査したところ、北京において、低所得労働者層は郊外の他に市の中心部周辺においてもほぼ均等に広く分布しており、五環以内の地域に各所得階級が比較的均一に分布しているⁱⁱことが分かった。そして、このような状況を可能にしているのが、前述のような市内に広く分布する老朽化した住宅地であると思われる。これらの住宅地は「城中村」と呼ばれ、市民と農民の戸籍上の区別、市街地と農地の二元化のから従来の制度から生じたものであるようだ。改革開放後、農村の

余剰労働力が大量に市の中心部に流入しする民工潮が生じ、農民工と呼ばれる農村戸籍を持つが市の中心部で単純労働などに従事する低所得者が北京で急増した。これらの者のニーズに合わせ、低廉な悪条件の住宅の賃貸借や売買が一つの物件につき複数人を対象に行われ、当時の流入人口が多い混乱し、取り締まりが十分にできない状況に付け込み北京の広範囲に広がったⁱⁱⁱ。さらに、これらの安価な住宅には十分に整備されないまま現在に至っても、社会保障や住宅補助を受けられない場合が多く、貧困状態からの脱却が困難な外来労働者等の低所得者^{iv}の他、大学院を受験する浪人生など若年齢層の人々に移り住み続けるなど利用されている状況にある^v。

これに対して、北京には企業のCEOなどの富裕層も多く居住し、これらの富裕層は整備された四合院や広大な別荘を所有している。特に、北京における四つの富裕層向けの高級住宅地は「四大富人区」^{vi}とインターネット上で称され、その贅沢な暮らしを垣間見ることができるといえる。

現状について

城中村にみられる住環境の問題に代表されるように、北京において貧困層の生活は富裕層とは質的に隔絶されたような関係にあり、貧富の差が深刻な状況にあることが目に見えて分かる。特に、城中村については、現状を解決しなければ、様々な問題が生じうる。例えば、城中村はあまり整備がされていない老朽化した住宅が集中していることから、防火など安全面において欠陥があると思われる、二〇一七年にニュースとなった大興の火災のように火災時の消火が困難なため広範囲に延焼し、被害が深刻化する恐れがある。また、計画的な都市整備や都市の衛生状況や都市の景観に及ぼす悪影響が大きく、社会インフラの整備をする上で阻害となりうる。さらに、貧困者が十分に救済されず、劣悪な住宅環境の中、貧困から脱却する見込みがない中で生活を

続けざるをえない状況となる恐れがある。北京に引き続き労働力が地方から流入する中で、これらの問題を是正しなければ、この先さらに事態が深刻化する恐れがある。

このような状況に対して、政府は対策を進めており、その一環として行われているのが、前述の城中村の問題の解決である。具体的には、城中村の土地や建物を徴収し、再開発を行い、対象地域の住宅の所有者に新たに建設された住宅の所有権の割り当てや金銭補償を行う^{vii}。これによって、これらの城中村に住んでいた者の生活水準の向上が期待できる。また、近年の条例や行政方針の変更などにおいては補償の基準の合理化、透明化や暴力等を伴う強制的な徴収を禁じる方針も打ち出されている^{viii}。このように、政府が城中村問題の解決を急速に行っているのは、北京市内において、貧困な生活を送る者と裕福な生活を送る者の物理的距離が近いことが関係していると思われる。前述のとおり、城中村の老朽化した住宅は整備されたマンションに隣接するものや高級住宅から車で数十秒の距離にあるものもある。両者が隣り合って存在することで貧富の差が一目瞭然となっており、それを意識せざるを得ない状況は政府に解決を急がせるインセンティブとなりうる。

しかし、解決を急ぐゆえに急速に進められている城中村の再開発には問題も存すると思われる。まず、強制徴収に際し、住民は自己の権利を法的に主張するのに十分な経済的能力を持たないことから、住民の意見が十分に聞き入れられないまま不動産の徴収や再開発が行われるという問題が考えられる。次に、城中村の再開発は表面上の貧富の差の是正にとどまるのも問題である。再開発によって生活水準の向上が期待できるのは所有権を持つものにとどまり、賃借している者を保護する規定は見受けられない。そして、前述のとおり城中村には住居を賃借しているにとどまるものも多く、これらの人々は所有権を持つ者以上に不安定な生活を送っているものが多いことから、救済が必要としている人に十分に届いていない状況であると言え



写真⑥ 4つ星ホテルから徒歩3分ほどのゴミ捨て場。夜になると捨てられているごみをあさる人が毎日のように現れていた

る。また、住居を失った賃借人は、引っ越しを余儀なくされることとなるが、引っ越し先としては、従来の住居と賃料が同価格帯で、政府の手がまだ届いていない場所にある城中村や郊外の住居、建物の地下室などが多い（写真⑥）。政府の城中村の再開発とそれにより住居を失った人々の引っ越しという繰り返しの中で、低所得の人々は政府の目が届かないようなより条件の悪い住宅環境の選択を強いられることになり、城中村とは違った見えない形での貧困が深刻化すると考えられる。実際、狭い空間を数人で共同賃借する人々のあり方は「蟻族」と中国で称され、社会問題ともなっている。また、北京研修中も、四つ星ホテルから徒歩三分ほどのゴミ捨て場においても、夜になると捨てられているごみをあさる人が毎日のように現れていた。

上述のような明確に認識できない見えない形の貧困は、従来のように貧困を強く意識させるものとはならず、問題解決のインセンティブが起こりにくいため、対応が遅れやすいと考えられる。対応が遅れる中で、外来労働者が

さらに増加し、貧困層が潜在的に増加すれば、問題が顕在化したときには対応が極めて困難な状況になっている可能性がある。城中村の問題の解決が進められる中で、新たに現れた貧困に対する慎重かつ着実な対策が求められる状況にあると言える。

まとめ

北京の貧富の差は本文の通り重層的で複雑である。特に住居に関しては、昔の社会制度とそれへの人々の対応から生じた城中村の問題が現在も存するのと同時に、近年においては、城中村の対策と人々のそれに対する動きの中で新たな貧困問題が深刻化している。これらの対策には莫大な予算を必要とし、短期で実現するのは困難である。しかし、貧富の差という問題が解決されないまま発展を続けるのは得策ではない。そこで、現在行われている城中村の再開発以外に新たな対策に着手する必要性が高いといえる。具体的な対策について検討するとともに北京の貧富の差の動向に引き続き注目するのこれから課題としたい。

注

- i 北京市の市の中心部にある環状の幹線道路のことで、内側は二環から外側は六環までである。
- ii 李君甫、李阿琳「北京社会阶层空间结构的特点、问题及优化」、北京社会科学、2016
- 郑承智、张旺锋、武炳炎、梁博「北京市外来人口集聚型城中村流动人口职住分离研究」、地理科学进展、2017
- iii 孙林「农民工居住权视角下城中村改造问题的思考」、城市观察、2015
- iv 北京社保网「2019年北京最低生活保障标准是多少?」、2019、<https://beijing.chushibao.com/wenti/18777.html>、2019年9月23日閲覧 参照

本地宝「北京公租房」, 2019。 <http://bj.bendihao.com/zftw/gzhs/>。 2019年9月23日閱覽參照

v 何深靜、錢俊希、吳敏華「學生化」的城中村社區——基於廣州下渡村的實證分析」《地理研究》, 2011

vi <https://baijiahao.baidu.com/s?id=1625882933679531104&wfr=spider&for=pc>。 參照: 2019年8月3日閱覽

vii 楊會「城市房屋拆迁补偿的程序构造」, 《內蒙古农业大学学报(社会科学版)》, 2011

viii 姜明安「法治政府必须认真对待公民权利——评《国有土地上房屋征收与补偿条例》」, 2011

ix 孫林「农民工居住权视角下城中村改造问题的思考」, 《城市观察》, 2011

中国における承継と発展

今回の研修を通じて、中国での伝統的文化の保護、承継の取り組みへの熱意と中国の経済、技術、都市環境など各方面における発展を実感することができました。

まず、伝統文化の承継について、研修中は特に京劇や昆曲といった中国の伝統劇曲について学び、観賞する機会が多かったですが、中国においては幅広い年齢層の方がその保護と承継に熱心であることを感じました。今回の北京研修で案内してくださったのは北京劇曲評論学会の方でしたが、この学会には様々な職業や年齢層の劇曲が好きな方が参加しており、国内における活動のみならず、海外に向けても劇曲を紹介するなど劇曲の伝承についての取り組みをされているようです。また、北京大学などの大学においても、学生が劇曲に関する現地調査に向き、保護の現状や問題点、解決案を提案する大変積極的な取り組みがなされていました。さらに、大学において開講されていた昆曲の講義は多くの学生でにぎわい、終了時には講師として来てくださった国宝級の昆曲役者に対し、盛大な拍手が送られ、学生たちの伝統文化に対する愛着がひしひしと伝わりました。各国において伝統文化の承継に従事する人が高齢化する中で、中国におけるこのような積極的な取り組みは、若者にも伝統文化に対して関心を持たせるものであり、伝統文化を未来に残すこと大きく貢献すると思います。

次に、今回の研修は中国に対する偏見を払拭し、その発展を実感させるものでした。例えば、ショッピングセンターの賑わいや整備された道路網から中国の経済面における発展が感じ取られ、テレビで報じられたような大気汚染は特にみられず、青空が見えていたことから、近年の環境保護の面における進歩を感じました。研修に参加する前にも、このような発展について聞いたことはありましたが、幼少期の中国に対する印象やメディアの大気汚染に対する過度な報道から中国の状況について一定の偏見を持っていました。しかし、今回の研修において、北京の現在の状況を実際に確かめ、更に国能中電の白雲峰CEOから中国の発電所や製鉄所などにおける環境保護の取り組みやその成果を伺ったことで、海外における報道に存するバイアスや自分が今までそれを特に疑うことなく受け入れてきたことの問題点を意識できました。そして、人民中国雑誌社の王編集長の様々なメディアを通じて多角的に客観的に物事を見るべきだという言葉の重要性が理解できました。この体験を教訓に、中国の現状やその他の様々な出来事をより客観的にみれるように注意したいと思います。

今回の研修は一週間と短いものでしたが、中国の伝統文化に親しみ、中国の近年の発展を感じる事ができたほか、自身の認識の問題点も認識することができた非常に有意義なものでした。今回の研修で中国に対して非常にいいイメージを抱いたので、これからさらに中国について理解し、機会があればまた中国を訪ねたいと思います。

(温可迪)

活動報告

【中国を見つめる】

「支教」から見る中国と日本の教育格差

田尻夏希

「支教」とは、中国において、都市から取り残された地方の小中学校の教育を支援し、中国の貧困地区の現状を変えようとする仕組みのことだ。私はこの研修における中国人民大学の学生の話聞き、初めてこの言葉を知るとともに、その活動に強い関心を持った。ここでは、私が彼女らの話を聞き感じたことや、実際に北京の街で生活する中で垣間見た格差について述べる。

中国人民大学文學院では、雲南省保山市にある澁水中学で十日間のサマーキャンプを行なっているそうだ。澁水中学のような地方の学校では、北京の大学に進学するような生徒は非常に少なく、また教師を中心とした教育リソースが不足しているという。調べたところ、中国では急激な国家建設や文化大革命により教育を受けていない大量の民弁教師が生まれたほか、教師の地位が低下し民弁教師への蔑視が定着していたという背景がある。その後も農村義務教育の管理主体を県にして各省がその財源を保障したり、民弁教師を公弁教師に転換させたりするなどの政策が取られたが、いまだに農村では限られた財源のもとで教師の賃金水準を確保するためなどから規定の生徒と教師の比率を守れていない学校や、人手不足から休講にせざるをえないため教師が研修に参加できないといった状況が存在するそうだ（周・二〇一九）。

この澁水中学で生徒六〇人が、中国人民大学や西南財經大学の二〇人以上の大学生とともに学ぶのだが、私はその授業内容にも魅力を感じた。「字里行間学習坊」という文学や言語、映画の授業や、「財商学習坊」という金融などの授業、「創意戲劇工作坊」という日本でいう図工やスキットの授業など、学生たちの専門分野を生かした教養や体験を重視した授業が並んでいる。他

にも、子どもたちでグループになって劇をする授業がある。演出の練習や道具の準備などかなり手がこんだ劇を作り上げる経験は、非常に厳しいが非常に貴重な経験になるという。私は、教育格差や学習支援と聞くとすぐに教科指導を思い浮かべがちだが、実際に「教育リソースが不足している」といっても、その問題は教科指導の遅れのみでなく、課外活動など直接試験では問われない経験が不足しているということもある。実際、日本でもほぼ全ての子どもが義務教育を受け学校に通い授業を受けられているものの、「相対的貧困」が問題になっている。これらは、学校に加えて、習い事や学習塾を掛け持ちしたり旅行に行ったりといった家庭での経験の差が大きな問題となっている。加えて、中国では留守児童の問題もある。中国民生部が発表した二〇一八年八月末時点のデータでは、農村部の留守児童は二〇一六年に比べ二二・七％減少した六九七万人だったそうだ。しかし、これら留守児童は四川省や安徽省、湖南省などに集中しており、いまだに大きな格差は残っている（AFP BB News, 二〇一八）。このような子どもたちは、親が仕事で忙しく子どもの教育に関心を持つ余裕がないほか、その世話をする祖父母世代が教



澁水中学での活動について話す、中国人民大学の楊春萌さん

ないために教育に熱心でない、またはその方法を知らないなどの状況にあるそうだ（麗・二〇一五）。先の話にも関連するが、このような状況ではまず学習意欲を持ってもらったり、集団での生活に親しんでもらったりする必要があるように感じた。「経済力に起因する部分が大きい学力格差がある」「大進学率に格差がある」状況を支援する方法といっても、教科指導を行って学力を身につけるだけではなく、より

育を受けてい子ども目線を重視した支援があるのだと強く感じた。

また、人民大学での話に加えて、二度、実際に北京の街で生活する中で格差を実感したことがあった。一つは、我々が宿泊したホテルの裏のスーパ―に行ったときのことだ。二〇時過ぎだったが、ふと異臭がしたので顔を向けると、しゃがみこみゴミ箱の蓋を開けて中身をあきっている人がいた。すぐ近くには大通りや大きなホテルがいくつもある場所であるだけに非常に驚いた。二つ目は、石景山の周辺でのことだ。途中から道の舗装がなくなり、周囲の家も時代を感じさせるようになったほか、「シャツに丈の短いズボンなどラフな服装の人や、駐車場を公園のようにして体操をしたりスポーツをしたりしている人が増えた。同じ市内でもここまで大きく生活スタイルが違っていることに強く興味を持った出来事だった。この二つの体験は特別に大きなものではないし日本でもホームレスの人は何度も目になっているが、私には大きな驚きとなった。おそらく、日本では「貧困」といってもあくまでも相



石景山法海寺周辺の道路

対的なものであること、また「世間の目」という意識から貧困を見えないようにする傾向が大きいのではないかと考えた。一方で、北京でのこれらの体験は豊かさのすぐ裏にあるような気がした。大きなホテルの裏ではゴミ箱を漁っている人がおり、中心部から車で一時間も移動しない場所には舗装されていない道路を挟むように古い家が立ち並んでいるということが、印象的であった。

今回の訪問を通して、私は中国国内や北京市内における格差への意識を捉えるよう意識していた。実際に訪問先の方や人民大学の学生にしても、福建や雲南出身の方、はたまた留学生としてマレーシアから来た学生など北京や上海など経済力があり先端的な教育が行われている大都市ⁱに限らず、多様な出身の人がいた。加えて、上記のような私が北京で感じた格差にしても、彼らにとっては日常目にするものであり、また、今回私たちはほとんどを首都北京の中でもその中心部で過ごしたので、普通に生活しているとおそらくもっと衝撃的な出来事はあるのだろう。今回の経験を通して、中国での格差への意識はわざわざ意識しようとして持つものではなく、各人が自分なりの経験とともに日常的に持っているものではないかと考えた。

さて、今回中国での格差に目を向けた経験から、日本について考えてみる。世界でも有数の先進国である日本にも、地域間での教育格差はいまだに存在している。例えば、沖縄県は他の都道府県に比べて貧困率が高いことで知られている。二〇一六年のデータで子どもの相対的貧困率は二九・九％（全国は一六・三％）である（沖縄県・二〇一六）。これは、収入が全国平均を大きく下回っているのに対して、食料品などを島の外から輸送してくる必要があるために物価が高くなっているⁱⁱこと、米軍統治の歴史から憲法や社会福祉関連法や制度が適用されていなかったことなどが挙げられる。また、東京二三区において葛飾区には、偏差値五〇以上の公立高校が存在しない。現在都立高校入試は学区制が撤廃されているため、葛飾区の中学生も偏差値が

五〇以上の高校に通うことができる。ただ、通学に時間がかかってしまうと、そもそも区としてこのような構造が出来上がっていることに問題意識を持って良いはずである。東大のような大学受験に関しても、岡山県や富山県、石川県などには、駿台予備学校や河合塾、代々木ゼミナールなどの大手予備校が存在しない。岡山県出身の友人は、模試を受ける際には神戸か広島まで新幹線で行ったりホテルに泊まったりしていたそうだ。もちろんこれらの例は、中国国内での格差に比べると些細なことかもしれない。しかし、日本でも家庭の所得だけでなく、地域によっても格差や不利益を感じている人がいるのだ。

日本でも子どもの貧困は、近年ニュースやメディアで取り上げられるなど関心が高まっている。日本では格差の原体験はなくても、実際に勉強すること身近な問題であると認識することは非常に大切である。また、日本でも学習指導ボランティアを行うNPOや体験を提供する団体・プロジェクトは存在する。例えば、東京大学には「UTSummer」という団体がある。夏に中高生を集めてキャンプを行い、ワークショップや自然を活かした体験活動を行なっている。一方で、中国のように「支教」というような支援を直接表現する言葉ができるということはないし、支援はまだまだ足りていないのが現状である。先ほどのプログラムのように、一つの大学からの希望者は一〇人ほどでも複数の大学で協力することでキャンプを実施できるほどの人数は集められるし、大学生などボランティアの意思や時間を持つ人が基金会などのNGOや財団と結びつく機会があれば、大きなプロジェクトを企画実施することが可能になる。例えば、このサマーキャンプにしても、澁水中学は北京から飛行機で三時間四〇分とバスで二時間、タクシーで一時間かかる場所であり、移動だけでもかなりの費用を必要とするだろう。学生だけではいくら強い意志があってもなかなか実行できることではない。このように、問題意識を持つ人を増やす取り組みだけでなく、問題意識を持つ人がもっと行動に

起こせるような仕組みや雰囲気づくりが、支援の充実に大きく関わると考え、これに関する日中両国での活動にこれから着目していきたい。

注

i 例えば上海は、経済協力開発機構（OECD）が実施する国際学習到達度調査（PISA）で二〇〇九・二〇一二年に世界一位を獲得した（Science Portal China, 二〇一三）。また、学力のみならず、北京や上海、天津といった先進地域では、政府が活動費を負担し学外から講師を招くこともある小学校でのクラブ活動など、興味関心を重視した「個性を育む教育」に力を入れているという報道もある（産経新聞、二〇一八）。

ii 例えば、二〇一五年度の一人当たりの県民所得は全国平均が三一九〇〇〇円であったのに対し、沖縄県は二二六〇〇〇円であった（内閣府、二〇一八）。また、消費者物価地域差指数は、全国平均を一〇〇とすると、沖縄県は九八・五であったが、品目別にみると食料が一〇三・〇、光熱・水道が一〇五・六など全国平均を大きく上回っている（総務省、二〇一九）。

参考

沖縄県「沖縄子ども調査の結果について 沖縄県子ども貧困率一月二十九日発表」、沖縄県、2016' <https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/kodomoyosa/documents /okinawakodomotyousa-hinkonritusukei.pdf>(2019-09-23 入手)

河合塾『校舎・教室』河合塾、2019' <https://www.kawai-juku.ac.jp/school/> (2019-09-23 閲覧)

産経新聞『世界を読む』格差を解消できない中国の教育…背景に特有の戸

籍制度』産経新聞 2018' https://www.sankei.com/west/news/180509/wst1805090004_n3.html(2019-09-23 閲覧)

周丹「中国農村義務教育改革の成果と限界：貴州省における現地調査を中心に」『東アジア研究』 Vol.17, 2019, p.61-87' <http://peit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/G0000006y2j2/metadata/D300017000004> (2019-09-23 入手)

駿台『校舎案内』駿台予備学校 2019' https://www2.sundai.ac.jp/yobi/sw/sundai/scontents_P/others1_PD/1337357686_559.html(2019-09-23 閲覧)

総務省「小売物価統計調査(構造編)―2018年(平成30年)結果―」総務省 2019' https://www.stat.go.jp/data/kouri/kouzou/pdf/g_2018.pdf(2019-09-23 入手)

内閣府「平成27年度県民経済計算について」内閣経済社会総合研究所 国民経済計算部 2018' https://www.esri.cao.go.jp/jp/sna/data/data_list/kennin/files/contents/pdf/gaiyo_u.pdf(2019-09-23 入手)

百度百科『支教』 百度百科 2019' <https://baike.baidu.com/item/支教> (2019-09-23 閲覧)

代ゼミ教育総研『代ゼミ校舎一覧』代々木ゼミナール 2019' <http://www.yozemini-eri.com/etc/map.php>(2019-09-23 閲覧)

麗麗「中国における農村留守児童の暮らしの現状と支援の課題―子どもの

視点から」

『東洋大学大学院紀要』 Vol.52, 2015, p.289-305' https://toyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=9011&item_no=1&page_id=13&block_id=08-29 (入手)

AFP BB News『農村部の留守児童2割減の697万人に16年比』AFP通信 2018' <https://www.afpb.com/articles/-/3195420>(2019-09-23 閲覧)

Science Portal China 【13-30】上海連続1位 OECD 学習到達度(PISA) 調査』国立研究 開発法人科学技術振興機構 2013' https://spec.jst.go.jp/experiences/coverage/coverage_1330.html(2019-08-29 閲覧)

UTSummer『企画概要』UTSummer 2019' <https://utsummer.jp/project/> (2019-09-23 閲覧)

「中国」そのものを学ぶ

私がこの研修で最も強く感じたことは、自国・相手国双方の文化や社会的・歴史的背景など様々なことに興味を持ち、学ぶ姿勢が、国際交流の際には非常に重要になるということだ。中国人民大学の学生との交流の際、中国の学生に「日本のこれが好き」と伝えられた日本の映画やテレビドラマ、アニメについて、私は「題名は聞いたことがあるが、観たことはない」としか答えられなかった。また、人民中国雑誌社を訪問した際には、「日本から中国への観光客数が伸び悩んでいるのは）中国への憧れを持つ日本人が減ったから」「日本語版の『人民中国』は、中国の日本語学習者が自国についての紹介の仕方を勉強するために読むことが多い」というお話をいただいた。

もちろん国際交流において、言語学習は非常に重要である。今回の研修でも、自分の中国語力の不足をひしひしと感じた。もともと私の語彙が圧倒的に不足していることはわかっていたので、関連する語彙を事前に調べたり、話している人全体を見るようにして今どういことが話されているのかを考えたりしていたが、言語の壁は私の想像以上に高く、何が話されているのかわからずもどかしい思いをすることが多かった。しかし、それ以上に、私は普段テレビやアニメを全く観ないし映画もほとんど見る機会がないが、あと少しでも興味を持っていたら、1話だけでも観ていたら、と期待に答えられなかったことが自分の中では残念に感じられた。

日本では、よく中国の国際的な影響力や市場としての巨大さが注目される。世界においてもこれは同様だろうし、私が中国語を学びはじめたきっかけも、「中国語を勉強しているとこれから成長性があるアジアでビジネスをする時に便利そう」といったものだった。しかし、日本にとって、世界にとって中国はそれだけの国ではないはずである。中華料理は各国の料理の中でも大きな存在感を持っているし、今にも残る日本の古典文化の多くは中国から影響を受けたものである。今回の研修でも、これまで全く観たことのなかった京劇や昆曲の世界を学ぶことで自分の中の美の価値観を豊かにしたり、巨大な故宮を訪れることでこれまでは世界史の中の事項に過ぎなかった明清の壮大さを感じたりすることができた。実益を求めた交流だけでなく、社会や文化における交流も人に確かに豊かなものをもたらしてくれると感じた。

私はこれからも中国語を学び続けたいと考えている。今回の研修で自分の未熟さを実感するとともに、今まで知らなかった中国の様々な側面に触れ、もつとこの国について知りたいと思ったからである。しかし、これからは中国語学習だけでなく、政治経済、外交、社会情勢、伝統文化、ポップカルチャー、メディア、流行など全ての側面を含めた「中国」「日本」両国そのものについて学ぶ姿勢を心がけたいと思う。

(田尻夏希)

中華文化と日本文化の共通基盤

— 中国人が守り抜いているものと日本人が大切にしているもの —

永安 郁弥

日本人の目に映る中国

平成が終わり時代は令和となった今、日本国民の中国という国に対する印象はどのように変わってきただろうか。はたまた変わってすらないのだろうか。我々日本人が中国や中国人について聞かれ真っ先に思いつくのは、「マナーが悪い」「礼儀正しくない」「声が大きく騒がしい」「大気汚染が深刻である」「日本の商品の真似をする」「日本の領土の領有権を主張し領海侵犯を行う」「世界一の監視国家」などといったネガティブなイメージが未だにほとんどであろう。しかしその一方で中華料理や漢方、中国文学などの中華文化は古くから日本に根付いており現在でも多くの日本人がその恩恵を享受し、それらの文化を楽しみながら生活をしていることが多い。私は常々この矛盾を抱いていたこともあり、隣国同士より仲良く関係を構築していきたいという更に中国を理解するために今回北京社会文化研修へ参加させていただいた。至った。

そこで私が本研修中で特定したキーワードは「中華文化と日本文化の共通基盤」である。同じ東アジアに属する日本と中国、それぞれが守り抜き大切にしている文化の根底には必ず共通の素因が潜んでいるはずだと考え、北京研修での経験を踏まえ本論文ではこの点について総合的に見解を深めていく。

テーブルマナー

我々は北京に着いた初日（九月八日）、北京戯曲評論学会の方々に熱烈な歓迎をして頂いた。そこでは非常に格式ばった宴会が開かれ、中国のフォーマルなテーブルマナーの一端を体験させていただくことができた。この日の主賓は一級国家演員の資格を所持されている叶金援老師で、まず主賓は入り口から最も遠い席（上座）に座り、その右側に客人側の主人が座る。左側には客人側の次席が座り、なるべく客人側と主人側の人間が交互になるように、また出入り口に一番近い席が下座になるように座る。食事に際しても主賓が食べたり飲んだりし始める前に口をつけることは禁止されており、たとえ主賓がどうぞと言ったとしても遠慮することがマナーとされている。料理を取る際も円卓を回すのは主賓に委ね、料理が回ってくるのを待つことなど数多くのテーブルマナーが存在していた。

またこの他にも、招待状である「請帖」を郵送や手渡しによって送り、客人をもてなす風習もある。主人が客人をもてなす宴会での着席の際には、主客はまず自分から上座に座るようなことはせず、次席の人に席を譲る仕草をしたうえで、主人や周りの人に勧められてはじめて座るというような席の譲り合いもみられる（西澤・二〇〇九）。

日本におけるテーブルマナーにも上座・下座の席次は非常に重要視されており、会席の場はもちろんのことタクシーや新幹線の席順などにおいてもこの考え



研修一日目に開いてくださった歓迎会

は適用される。また主賓が食べ始めるまで周りは食べてはいけないことなど、日本の食事作法においてもこの点では共通したものが残っている。上座に座ることを勧められたのち最初に遠慮するそぶりを見せるなどといった行動は、日本人なら誰しも理解できるのではないだろうか。

私はこの「テーブルマナー」における日本と中国の共通基盤は「儒教」にあると考えた。儒教は主にその重層性を成す仁・義・礼・智・信といった道徳のほかに忠・孝といった固定された人間関係の中での実践道徳も欠かせない要素となっている（土田、二〇一一）。これらは君臣関係と親子関係の間に成立する道徳であり、現在東アジアに浸透する目を敬うという道徳の基盤になっているものと考えられる。事前調査課題で調べた中国語の敬語についてもみられるように、目上の人の呼び方や相手にストレスを与えない言い回しなどは日本語をはるかに超える数存在しており、言葉や食事文化の根底に根強く残っている。このように食事や言語を取っても、刈間先生の仰っていたような中国の階級社会の一端が存在することを垣間見ることができ。儒教は悠久な歴史を持つ中国を語るに必要不可欠な要素であり、このような自己修養を強調するような道徳がなかったら前近代の中国は力による支配のみになっていたであろうし、共産主義社会においても儒教がなければ現在のような統治がなされていなかったであろう。文化大革命では一時期儒教が否定される段階が存在したが、文革後儒教が再興するようになり、現代でも儒教の存在意義は十分に議論するに足りうる。

そしてこれらは日本においても同様であることは言うまでもなく、我々の日常生活の基盤を造っている中華文化の一つである。日本は古来、儒教と仏教の二教を最も取り入れており、またそれぞれの教えを日本人は独自に再創造を繰り返して今に至る。そのようにして儒教は日本人の生活に深く浸み込むようになり、生活様式や言語、考え方の基盤を構築してきた。例えば「元氣」という語であるが、これは易経の中の「乾の卦」という語に由来している専

門用語なのである（安岡、二〇〇二）。多くの日本人はこのように日本に浸透している儒教が紀元前の中国発祥であることは知ってはいるのだろうが、マナーが悪いというイメージが浸透しているためか中国人がこのようにに礼儀や作法、目上の人を敬うことを非常に大切にしているということを知ると驚く人も少なくないだろう。

儒教と陰陽五行

儒教が説く諸価値の源泉である「天」には、天空・天の神・自然界の理法という複数の意味が含まれている。儒教の諸価値の源泉である自然界を分析する際に、ほかの思想と同じように陰陽と五行を使用する。これらは中国の戦国時代から見え始め、多くの学派に取り入れられていった。この陰陽五行の使用は儒教に限定されていたわけではないが、儒教ではこれ以外の原理を用いることは稀であった。

中華文化の人文精神

我々は研修三日目に訪れた中華文化学院において、郅建華博士による「中華文化の人文精神」という題の講義を受けた。この人文精神における重要な要素は、人間の価値と主体性を重視する「人間本位の協調」、人間は道理と義理を明確にしつつ道徳教養と情操の涵養を図り自分自身を超えることに重きを置く「人文教化と徳行の向上」、「中正と平和の理念の重視」の三つが存在する。このうちの三つ目の要素に陰陽と五行の考えが重要視されている。郅博士はその中でも陰陽消長と五行生克を挙げ、説明してくださった。陰陽消長とは、陰陽はいつも静止・不変の状態ではなく、お互いの力関係に基づいて常に変化しているという考え方であり、五行生克とは、木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず、という五行相生

と。木は土に克ち、土は水に克ち、水は火に克ち、火は金に克ち、金は木に克つ。という五行相克からなり、五行の間では相互依存と相互制約の関係がつくられており、この相互平衡と協調を維持することでひとつの整体となっているという考え方である。

私はこれらのお話を聞いて、一連の内容はかつて日本でも大切にされてきた思想であり現在にも十分通用するような思想・道徳であると考えた。特に陰陽五行の思想は、日本でも古代から家や建物を建てる際の地鎮祭の儀式にも用いられていた。また平安時代に陰陽師という職業が存在しており、土木工事の際の「犯土」によって土公神の祟りを鎮めるために土公祭をさせていたように、日本では古来より陰陽五行の思想は生活において非常に重要視されていた(坂出、二〇一一)。

また博士はこれらを基にした中華文化の一つとして中医学を挙げて説明してくださった。



中華文化学院にて、部博士と伊藤先生



陳飛先生による中医学体験

中華文化と中医学

我々は研修六日目に石景山にて北京の歴史を教えてくださいました中医学を専門にされている陳飛先生に中医学を体験させていただきました。先生は左右の腕の脈をそれぞれ数十秒測り、その情報のみで現在の身体の状態を把握することができていた。この時引率の伊藤教授は、「上火」の状態で、陰陽バランスが陽の側に偏っている状態であった。中医学の先生は脈を診ただけでその人の身体の状態がわかるという。そしてこの科学の根底には陰陽五行の思想が強く支配している。朱震亨の『格致余論諺解』によれば、五行のうち「金水土」を陰、「火木」を陽とし火を「君火」・「相火」の二つに分ける三陰三陽・五行六氣の理論が提唱されており、それらは傷寒つまり熱病が進行する経路の症候を説明する『傷寒論』などにも用いられている(熊野、二〇一一)また、陰陽平衡の偏りを正すための食べ物や薬なども多数存在し、現在日本でも広く活用されている薬膳や漢方へとつながっており、多くの現代日本人に多大な恩恵を施している。

総括

ここでは中国と日本のテーブルマナーや敬語の共通基盤である儒教、その儒教や漢方の基礎となっている陰陽五行説などを挙げた。これらは日本においてははつきりと認知されていないほど生活に浸透し、中国ではそれらを学び、守っているという姿勢がよく見受けられ、日中両国の国民の共通基盤となっていると言っても過言ではない。この中華文化を教育する中華文化学院は中央社会主義学院の隣に存在していることもあり、中国共産党は中華文明の核心を受け継ぎ、中国特色的社会主義は中国の悠久な歴史を受け継いでいる。ここで言いたいのは日本人が中国共産党と社会主義を認めてほしいというのではなく、中国と日本は政治・生活の両面においてその根底に同じものをもつ民族の集まりであるということである。北京社会文化研修は我々に



お世話になった北京戏曲评论学会の皆さんと

中国人も日本と同じように昔のものを大事にし、古代より伝わる思想を守り活かしているということを教えてくれた。数千年もの長い歴史を持つ両国はこれら以外にも莫大な文化の共通基盤があるであろう。我々日本人はこれらをより詳しく知り、学び、中国の文化をさらに深く理解すれば更なる日中友好へつながるはずである。

参考文献

- ・熊野弘子(2011)「岡本一抱の医学テキスト解釈と概念」『陰陽五行のサイエンス―思想編―』pp.259-281 京都大学人文科学研究所
- ・坂出祥伸(2011)「我が国における地鎮儀礼と犯土の観念―その道教的起源をさぐる―」『陰陽五行のサイエンス―思想編―』pp.219-227. 京都大学人文科学研究所
- ・土田健次郎(2011)『儒教入門』東京大学出版会
- ・西澤治彦(2009)『中国食事文化の研究―食をめぐる家族と社会の歴史人類学』風響社
- ・安岡正篤(2002)『論語に学ばず』PHP文庫

北京研修が変えた北京のイメージ

北京研修に参加するまで、私の中での北京という街のイメージは中国共産党の中枢が存在する首都であり政治色の最も強い街というイメージであった。そしてその中国共産党は日本ですっと生活している限り、国民の言論の自由を奪い、情報を規制し、四六時中国民の行動を監視するような独裁的な政党であるという認識しか得ることができなかった。このような認識の中国共産党が大いに具現化された街である北京へはすっとこうした印象を抱いていたのである。

しかし、一週間北京社会文化研修へ参加して北京に対する印象はがらりと変わった。東大に入学し「二六」へ入ったのち中国語を集中的に勉強し始めてから中国文化にもある程度触れる機会が多かったのであるが、やはり実際に赴いて現地の高い地位の先生方のお話を聞かせていただいたことはこれまでの一年半で触れたものをはるかに凌駕するものであった。

今回は北京戯曲評論学会の方々にお世話になったということもあり、本格的な京劇やに触れることができたことで悠久な北京文化の真髄を知ることができ、より中国の歴史や文化に対する理解が広がったように思う。中国人も日本と同じように古くからの芸能をしっかりと大事にしており、またそれらを年代問わず体験することが好きな人が多いことにはとても感動した。また、京劇などの芸能を専門にする学校があり小さい頃から英才教育を行っているということは日本ではあまり見たことがなく、中国人の「芸」に対する熱い情熱を感じざるを得なかった。

人民中国雑誌社への訪問では、20年以上も中国について日本語で発行しているということもあり、日中両国の関係性などといったことも、出版という観点から振り返ることができた。最初、「人民中国」は中国政府直轄の広報誌であるということを知っていたため、もっと政府のプロパガンダ的なものが強いのかと思っていたが、実際は全くそうではなかった。中国の事情を一方的に報じるだけでなく、日中双方の情報交換に重きを置いているということに驚き、これまでもこれからも日中の関係を保つ重要な雑誌であるということを確認した。王衆一編集長は、特に検閲などが存在しないこの雑誌において、上からの要求と自分たちの要望のバランスを取り、その責任を一人で負っていらっしゃることに本当に感動した。

近年日中関係は急激に良くなっていると言われているが、実際それは常々各所で感じつつある。しかし特に年配の日本人などは未だに中国にいい印象を抱

いていない。今回北京研修に参加して、中国人と日本人の思考や中国と日本の文化などの根底にあるものは共通なものが多いということを一番感じた。また、現在経済発展が著しい中国の最先端で活躍する人たちのお話や業績を聞いて、かつての高度成長期中の日本のような印象を抱いた。王衆一編集長も仰っていたように、今回実際に訪れて本物の文化に触れることでこれまで日本で学んだ以上に中国への理解に向けて得られたものが多かった。これから欠かせないパートナーになるであろう中国をより多くの日本人が理解できるようできることから貢献していきたいと強く思った。

(永安郁弥)

「イメージ」と「実像」の狭間で揺れ動く日中 —北京社会文化研修「深思北京」を通して—

布施 晴香

「中国のイメージ」とは一体、何なのだろうか。

イメージとは心の中で作り上げたもので、決して実像ではない。私は、専攻する国際関係論の文脈から中国を捉えるも多く、中国に対して「世界第二位の経済大国となり、世界をリードしていかうとする『発展途上大国』」というイメージを持っていた。ただ、それは往々に、外交やメディアを通じて中国公式の対外発信や、「諸外国と経済的な繋がりを強化すると同時に、軍事力強化を通してハードパワーを確立し、自国に有利な形で地域秩序を修正して地域覇権を確立する『発展途上大国』」というような日本や欧米の国際政治学の認識に偏っているⁱ。私と同様に、多くの日本人も自らのバックグラウンドに大きく影響された対中イメージを持っているだろう。

では、日中両国の人々は相手国に対してどのようなイメージを抱いているのだろうか。日本の言論NPOと中国国際出版集団が日中の両国民を対象に実施した「第十四回日中共同世論調査」の結果によると、中国人の日本に対する好感度が改善した一方で、日本人の中国に対する印象はわずかに改善しているが、中国に「良くない」印象を持っている人は八六・三%と依然九割近く、対照的な状況となっているⁱⁱ。

ただし心の中の「イメージ」は自らの実体験を以て容易に変化するものだ。前述の調査でも、日中ともに相手国訪問の経験はその相手国への印象を好転させることが分かっており、特に日本への訪問経験がある中国人の七四・三%もの人々が日本に対して「良い」印象を抱いており、訪問経験が

ない人の三四・九%を大幅に上回っているⁱⁱⁱ。実際に私は、サマースクールのなどで南京に二度訪れ、中国人の友人と交流し、文化や社会について理解を深めることで「国家」や「中国人」に対するイメージも変わっていったことを鮮明に覚えているし、「内側」から理解することの重要性を痛切に実感した。そこで私は北京社会文化研修「深思北京」を通して、現地の多様なフィールドで活躍する人々に実際に会い、交流することで、自分が中国に対して持つ「イメージ」を「実像」に少しでも近づけたいと考えた。その試みは私の中でどのような変化を生んだのか、そして将来の日中関係改善への手がかりはあったのか、という問いに向き合うため、本レポートでは北京研修での経験を振り返り、「イメージ」と「実像」についての見解を述べたいと思う。

実を言うと、一週間の北京研修は一つの小さな驚きから始まった。二度訪れたことのある南京に比べて、そして私が想像していたより遥かに多くの、中央政府や共産党のスローガンや横断幕が街中に掲げられていたのだ。特に、国内外から中国の首都へ向かう多くの人々が使うであろう、北京首都空港から市中心部へ向かう幹線道路では、高架や橋に差し掛かる度に「社会主義の核心的価値観」や「中国の特色ある社会主義の建設」など様々な言葉が目に見え込んでくる。それはまさに「幻影之旅 (phantom ride)」^{iv} のように、私の中の「中国共産党が強力で統治する中国」イメージへと引き込んでいった。

しかし、研修が実際に進むにつれて前述の感覚は薄れていき、むしろ北京や中国が持つ重層的なイメージを強く感じる事となった。例えば、「北京」という都市自体については、政治や経済、商業、歴史、文化が凝縮されて共存していた。研修中に訪れた場所も、人民中国雑誌社や大使館街、金融街、民間企業、故宫博物館、大学と幅広く、一〇〇〇年を超える文明を育てた都市「北京」の多様な側面、また過去・現在・未来が垣間見えたと考えている。より詳しく見てみると、様々な分野で北京、そして中国の将来を見据え

真剣に考え抜く人々がおり、実際に現地に行かなければ実感できない中国の「人」や「考え」の多様性が存在していた。例えば、三日目に訪問した中華文化学院では、普段は一見してイデオロギーやプロパガンダと自動的に認識してしまいうるようになる思想や考え方の背景に、中国の長い歴史や培われた思想・哲学があり、それを如何にして現代に読み替えるのか、という大きな課題に向き合う人々がいた。また国能中電では〇田〇をはじめとする幹部の皆さんが、中国での環境保護の技術や事業で以て社会に貢献し続けていく覚悟を語ってくださった。さらに、北京大学芸術学院では昆曲をはじめとする伝統芸能を後世に継承するべく真剣に考える学生たちや第一線で活躍する俳優の方々に会い、さらに伝統芸能を伝えていく主体でもある観客（受講生）の熱気を肌で感じる事ができた。これらの経験は、中国の「内側」から自分の肌感覚で感じ学んだことであり、日本で「中国人」、「政治」、「文化」などと非常にざっくりとした枠組みの中で中国について考えるよりも、よりリアリティーを持って多様な「人」や「考え」をそれぞれ理解し、その感覚を自分の中に根差す事ができたのではないかと考えている。

本研修の中でも最も印象に残ったのは、人民中国雑誌社の王衆一編集長とのお話の中で出てきた「バランス感覚」である。外文局の下で七〇年近く中国の対外発信を担ってきた人民中国雑誌社は、国内の政治的混乱や世界情勢のめまぐるしい変化の中で、常に時代の先を見据えて、日中友好の架け橋となり「等身大の中国を伝える努力」を重ね、「歴史の試練に耐えられる刊行物」を目指し、さらにはジャーナリズム全体をより良くしていこうと奮闘してきた。そのために必要不可欠だったのが、政府広報誌として出発した背景を克服し、イデオロギーやプロパガンダと、コマースシャルのバランスを保つことだ。政府が内外に積極的に発信したい事柄と、雑誌『人民中国』の読者に関心を持ってもらえる事柄のバランスは、「異文化の中を生きるメディア」として長年培ってきた賜物である。そして、このバランスの小さな積み重

ねがやがて「歴史の試練にも耐えられる」架け橋になることを、『人民中国』の長い歴史が証明していた。ただ、この稀有なバランスは広報の文脈だけでなく、あらゆる異文化交流や外交、ビジネスの文脈でも必要になるのではないか。自分の主張を声高に主張する、とまではいかなくても、自分の主張がどうしたら効果的に伝えられるのかを苦心するあまり、相手への尊重や配慮がなおざりになってしまいうることはないだろうか。国籍や民族、宗教などの違い以前に、一人の人間として相手に向き合うコミュニケーションでの基本的な姿勢のあり方を改めて強く感じさせられた。

ここまで本研修を通して私個人の経験と中国に対する「イメージ」の変化について述べてきたが、研修でお世話になった方々や中国人民大学の学生との交流を通して感じ取った中国側の「イメージ」にも少し触れておきたい。学生も先生方も日本に対して好意的な印象を抱いているようで、具体的には食事の時間に話していた文化や観光に関する側面が多かったと感じた。また、特に先生方は自らの研究分野における日本の研究者たちの貢献や交流についても造詣が深く、過去から現在までの長いスパンの時間軸で「日本」が語られることが多かった。一方の学生たちとの交流では、観光や、映画やドラマなどエンターテイメントについて語るが多かったが、ただ「行きたい」「観たい」という願望を語るのではなく、実際に「行く」「観る」といった具体的なアクションに結びつく傾向がとても印象的だった。

以上、日中世論調査の結果や、北京研修を通して得られた経験や自分の中での変化について述べてきた。では、私の中で「国家」や「〇〇人」に対する漠然とした「イメージ」を「実像」へ近づけたのは、何だったのだろうか。私は、現地で様々な人と交流し一人の人として向き合うことで、相手への尊重を忘れず、リアリティーをもって相手を理解しようと努力し行動することこそが「イメージ」の変化の重要な要素になるのだと考える。情報が氾濫する現代社会において、自分の目で、肌で感じ自分の感覚に落とし込んでいく

ことは非常に貴重で重要なことであろう。

ただし、「実像」を完全に理解することは難しい。多様で奥深い「国家」や「人」を理解するのはなおさら難しいだろう。なぜなら、「国家」の「実像」は特定のものではなく、様々な「イメージ」が重層的に積み重なり、結果したものが、全体として一つに見えると考えるからだ。さらに、一個人にとつての「イメージ」や「印象」は、あくまでその積み重ねから一部分が抽出されたもので、どの部分が前面に押し出されて見えるかは人それぞれ違うだろう。したがって、本研修で得られた経験をもとに、私の中国や北京に対するイメージは、もともと政治や国際関係論からの観点到偏っていたものが、文化や経済面の理解が加わり、「実像」に少し近づいたと言ってもいいのかもしれない。しかし、それは「イメージ」に変わりはない。それでも、「イメージ」を少しでも「実像」に近づける努力を根気よく続けていくことが非常に重要であるだろう。

最後に、冒頭で引用した「第十四回日中共同世論調査」によると、中国人の日本に対する印象は大幅な改善がみられるものの、安全保障に関するイメージでは日中両国ともに悪化していることが分かる^{vi}。お互いがお互いを脅威とみなしており、「安全保障のジレンマ」の様相を呈しているようにも見える。こういった国際環境であるからこそ、「イメージ」で相手を語るのではなく、「イメージ」を少しでも「実像」に近づける努力は以前にも増して重要になっている。その小さな努力の積み重ねこそが、お互いの相手国に対する印象やイメージの改善に繋がり、最終的には将来の日中関係をより良くしていくことに貢献するのではないかと考える。

注

i 川島真「中国の対外政策目標と国際秩序観 習近平演説から考える」『国際問題』、2018年、29-34ページ。

ii 特定非営利活動法人「言論NPO」 「第14回日中共同世論調査」結果 (<http://www.genon-npo.net/world/archives/7053.html>) (2019年9月29日閲覧)

iii 特定非営利活動法人「言論NPO」 「14回目の日中共同世論調査結果をどう読み解くか」 (<http://www.genon-npo.net/world/archives/7058.html>) (2019年9月29日閲覧)

iv 初期映画において流行した撮影手法で、劇場内の観客にモビリティの感覚を与え、映画の中の未知の世界に没入させる役割を果たした(2019年9月11日の中国人民大学での講義「電影導論」より)

v 2019年9月10日の人民中国雑誌社訪問における、王衆一編集長のお話の中で。

vi 特定非営利活動法人「言論NPO」 「14回目の日中共同世論調査結果をどう読み解くか」 (<http://www.genon-npo.net/world/archives/7058.html>) (2019年9月29日閲覧)

北京社会文化研修「深思北京」で出会った人々の魅力

今回の北京社会文化研修「深思北京」は、私にとって初めての北京だった。大学のサマースクールやフィールドワーク研修で南京に二度行ったことはあるものの、南京に行っただけで広大な中国について理解できるわけでは勿論ないので、北京は南京とはまた違う「中国」を見せてくれるのだろうかという大きな期待を胸に本研修に参加した。研修後に振り返ってみると、その期待を大きく上回る収穫が得られ、その経験はこれからの将来の糧になる貴重な経験だったと感じるのだ。

そこで、まずは、この研修を実現してくださった関係者の皆様に感謝申し上げたい。一週間の北京滞在ではこの上なく快適な環境を整えてくださり、また毎日の研修活動はスムーズに進み、企業訪問や見学、文化講座、大学での講義聴講や学生交流など、実に多様な経験をさせていただいた。この多様な経験を通して、様々な角度から本研修の核心でもある「北京を重層的に考察する視点」を獲得し、自分の肌感覚に染み込ませることで、将来の糧にできたのではないかと感じている。

こうした北京でしか得られない多様な経験の中でも、特に印象に残ったことがある。それは、研修中に北京で出会った方々の心の中の「芯」だ。本研修でお会いした方々の多くは大学の先生方や企業をリードする幹部が多かったが、彼らは自分の中に強い信念や誇りを持っており、一本「芯」が通っていた。そして、聞く人をぐっと惹きこむ不思議な魅力にあふれていた。私は、彼らに対して心からの尊敬の念を抱き、また、このような魅力あふれる人になりたいと心から思ったのである。さらに最も印象的だったことは、彼らの言葉に日本に対する尊重が随所に滲み出ていたことである。日本の文学や、日本の華道、日本の研究者の貢献、また日本の環境保護技術についてなどだ。そして、それらは中国の経済・文化その他の分野の発展に欠かせなかったのだという文脈で語られていた。ただ「すごい」と褒めるのではなく、相手に対する尊重が自国に対する誇りや将来への期待に相互に繋がっている。このようなポジティブで対等な立場に立つての尊重は、日本ではあまり見られないように感じた。この尊重こそが異文化コミュニケーションにおいて、そしてひいてはこれからの日中関係にとって非常に重要になると思うのである。

一方で、今回の北京研修は私の北京に対する第一印象を決定づけるくらい濃密で充実した経験であったが、この経験のみで北京や中国を語ることはできない。これからも「尊重」を胸に更なる経験を積み、将来のキャリアでもプライベートでも「中国」と長く関わっていきたく強く思った。

(布施晴香)

あ
と
が
き

一週間。研修期間として、短いとも言えるし、長いとも言えます。中国語のスキルをはっきりと伸ばすためには全然時間が足りませんが、北京社会をちょっと体験するだけなら十分すぎるくらい時間と言えます。この研修の特徴は、一つは、期間が一週間だという点にあり、これが絶妙なのだろうと思います。そして、その一週間がおそろしく多彩で濃密だということ。それがこの研修の二つ目の特徴です。今年の研修も、研修初日から、最終日の夜まで一週間の間、なかなか普段は体験できない北京の社会的文化的事象を次々と体験する濃厚な研修となりました。

東大の学生と中国人民大学文学院の学生との間の交流もこの研修の重要な一コマですが、他の多くの国際研修と大きく異なるこの研修の特徴は、やはり、大学という枠を離れ、北京社会の中の様々な社会組織の中に飛び込んで行き、東大で学んだ中国語を使って交流するという点にあると言えましょう。「人民中国」社では日本語での交流となりましたが、中国語スキルが十分でない参加者は冷や汗をかいたことでしょうか、かといって、そのために言葉に詰まって交流が成り立たなくなるといえることはなく、全員が粘り強くその場その場の交流を成立させました。八人の参加者の間の空気も傍目で見ただけでは和気あいあいといった感じで、引率者としては嬉しい限りでした。

私たちは、研修三日目の九月一〇日（火）の午後、北京の中心部の建國門外にある国能中電（国能中電能源集団有限責任公司）という、環境保護活動をビジネスにしている巨大な営利企業を訪れました。（<http://www.cpepgroup.com/index.php?siteid=1>）。中国で非常によく知られた青年実業家である白雲峰董事長兼CEOとその他数名の社員が、瀟洒な本社の建物の一室に私たちを出迎えてくれました。交流会が終わった後の夕食会で、私の隣に座った会社ナンバー2の技術畑の方（名刺がもらえず、名前を失念）が、私はあまり日本人と付き合ったことがないが、と断ったうえで、日本人は中

国人と同じ東洋人なので「人情」がわかっていて、と話しかけてくれました。どういうことかと言えば、以前アメリカのスタンフォード大学の学生たちが私たちと同じように訪問した際、スタンフォード大学の学生たちは、会社の広報ビデオを見て、国能中電を批判するばかりで、結局ずっとスタッフと学生たちの間で喧嘩腰の論争になってしまったとのことでした。そんなスタンフォード大生は「人情」を理解しないのに対し、東大生は「人情」がわかる、ということなのです。非常に友好的に、ある意味褒めてもらったので、私はそのまま受け取ったのですが、このあたりにはいろいろ考えるべきこと、反省すべきことがあるように私は思いました。

参加者の一人がそのビデオを見たあとで、中国の環境汚染について、自分が観たことのある西洋のあるメディアが作成したビデオとは、だいぶ伝えている内容が違う、と言ったところ、それまで非常に落ち着いた態度でテキパキと周到でエッジの効いた説明を私たちにしていた白雲峰董事長が、突然色を正して、「それは中国の醜悪化（醜化中国）」だと鋭い声を発しました。それでその参加者は疑問の追及を控え彼の言葉に慎重に耳を傾けることになりました。この態度は非常に良かったと思います。ただ、明らかに、このあたりにはセンシティブ（敏感）な問題が隠されており、その背後には、国際的で社会的かつ文化的な大問題が横たわっていることを感じさせました。私たち東大訪問団はこの場面に限らず、概ね、センシティブな問題になるべく触れないよう立ち回ったと言えるかもしれません。それを、会社ナンバー2の技術畑の方は、「人情がある」ということばでやさしく包んでくれたのではないのでしょうか。そういう「人情」は昨今多用されるようになった「付度」という日本語と通じるところがあります。

「人情」を理解することも「付度」することも、本来決して悪いことではありません。人の話に耳を傾け、人の気持ちに寄り添うことは、現代人にとって、むしろ必要な美德とさえ言うてよいと思います。彼の言葉は言葉通り受

け取っておきたいと私は考えるものです。しかし、もしかしたら、彼も、私たち東大訪問団との交流には、ある種の物足りなさを感じたのかもしれない。それをやんわりとあややつて伝えてくれただけなのかもしれません。

たった一週間の研修で最大限の収穫を得るために、当初、参加者には、それぞれの課題設定を要求しました。そのうえで、しかし、それに縛られずに、見聞きする北京の現状を、曇りのない眼で、柔らかく鋭い耳で、ありのまま、そのとおりに、受け取るようにしてほしいと伝えました。そのことは今でもまちがった指示だったとは思っていません。ただ、あくまでも团长としての私の自己批判として言うのですが、その場の空気を壊すことを恐れて、本当の相互理解に達するために必要な思い切りの良い踏み込みが、若干足りなかったように思います。それは勇気や大胆さだけの話ではなく、信頼関係を損なわないための、様々な語彙、表現技術、作法とセットの話です。信頼関係を壊してしまったら相互理解など土台無理な話なのですから。

参加者にとって、今年の研修が記憶に残る極めて有意義な体験になったであろうことは、彼らがこの報告集のために寄せてくれた文章を読むと、全く疑いようがありません。参加者は、もし機会と余裕があったら、これからでも、二〇一九年九月の北京での見聞や出会った方々のことを思い起こして、インターネットで調査したり、書籍を読んだりして、自らの経験を立体的にそして広がりのあるものとして、再確認して行ってほしいと願っています。東京大学・教養教育高度化機構（国際連携部門）に属するLAP（リベラル・アーツ・プログラム）としても、今後の活動に、今年度の北京社会文化研修の経験を是非活かしていきたいと思えます。

二〇二〇年二月二一日

伊藤 徳也

編輯後記

山川异域，风月同天。

彼时我们都不会想到，Q老师在研修结束前日留给大家的这句临别赠言，在半年后的如今竟会引发如此之大的反响。

中国爆发新型冠状病毒肺炎疫情后，日本汉语水平考试机构的负责人捐赠给湖北高校的支援物资上也附上了这句意味深长的偈语。一经报道，便感动了许多的中国人，甚至引发出竞相和诗回赠的文化现象。这场意外带来的“日本热”、“文化热”席卷全网，让人一度错觉穿越到那段被成为中日蜜月期的八十年代。其间，一直以来致力于两国友好的传统民间团体，老一辈友好人士的活跃身影尤为突出。那么，在这场新世纪的友好互动中，年轻一代人又在做什么，又能做些什么？

2月10日，中国国内的友人发来一段视频。视频里，一位东大本科生结束了一下课便马不停蹄地赶去池袋，为支援武汉的募捐活动表达心意。这段视频中的主人公正是我们“深思北京”活动2017度的研修生M同学。募捐这一举动固然让人感动，但作为近年的领队之一，更为感慨的是相较于两年前，M同学的中文表达真的有了令人惊喜的飞跃式进步。想必，因为北京研修的契机而赴中国留学的这短短一年时间里，M同学一定结识了许多优秀而温暖的朋友。

同样的，早在1月24日（也就是中国的除夕），2016年度的研修生N同学就用中英双语在社交网络发表了一段声援武汉的文字。微信朋友圈里，2018年度的研修生D同学、S同学也都第一时间向研修时认识的中国友人发去了暖心慰问……诚然，我们的年轻人，能力与经验尚不及前辈友好人士，但也都在以自己的方式呵护着珍贵的友情。虽不能至，心向往之。国与国之间所谓基于尊重 and 理解的友好，归根结底，不正是始于这每一个微小个体的跬步细流吗？

“深思北京”活动迄今六届，作为国际交流项目而言，同样年轻稚嫩，摸索中前行，实践中成长。往届的研修生多已走出校园，步入社会，虽不是每位同学都活跃在与中国相关的工作领域，但从不时的联络间，依然可以感受到大家都十分珍惜与汉语的缘分，与北京的缘分，与中国的缘分。

眼下这个尤其考验语言能力，情报收集、分析能力，独立思考能力的特殊时期，当本年度的研修生们在一系列的报道中再次看到开头的这句话时，又会如何忆起去年初秋在北京，如何忆起曾在那里邂逅的师友呢？

汉语里有一句话叫“患难见真情”，但我更期望，无论患难与否，我们都能以真心相待，以真情相惜。

2020年3月

朱芸绮

写真集



热烈庆祝中华人民共和国成立70





執筆者一覧（50音順）＊所属は2019年9月現在

温	可迪（うえん けでい）	教養学部2年
頃安	美咲（ころやす みさき）	法学部4年
田尻	夏希（たじり なつき）	教養学部2年
永安	郁弥（ながやす いくみ）	教養学部2年
増田	夏子（ますだ なつこ）	教養学部4年
三浦	駿人（みうら はやと）	法学部4年
布施	晴香（ふせ はるか）	教養学部4年

2019年度北京社会文化研修——深思北京

協力

中国人民大学文学院
北京戯曲評論学会

引率教員

伊藤徳也 大学院総合文化研究科・教養学部 教授
朱 芸綺 教養教育高度化機構 特任研究員

担当

東京大学・教養教育高度化機構リベラルアーツ・プログラム (LAP)

原 和之 大学院総合文化研究科・教養学部 教授
伊藤徳也 大学院総合文化研究科・教養学部 教授
白 佐立 教養教育高度化機構 特任准教授
朱 芸綺 同 特任研究員
青井亭菲 同 事務補佐員

本研修は、株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金による支援をいただいて実施されました。

深思北京

2019年度北京社会文化研修報告集

2020年3月初版印刷

編集 / 装幀 朱芸綺

発行 東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP)

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

TEL 03-5465-7671

URL : <http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/>

E-mail : admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp

表紙写真 : 高一丁